
王子様の片思い！

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様の片思い！

【Nコード】

N2644L

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

高校の入学式で、まるで王子様のような男の子に一目惚れした雛子。

でもその男の子も、入学式で別の女の子に一目惚れしていた。しかも、どうやら彼は一筋縄ではいかない性格のようで・・・

第1話 プロローグ

どこにでもいるような、冴えない女の子。

その女の子が、例えば高校の入学式で、素敵な男の子に一目惚れする。

だけど、女の子はその男の子となかなかおしゃべりできない。ライバルだってたくさんいる。

「彼が私を見てくれることなんて、絶対はない」
女の子はそう思ってる。

ある日、女の子が教科書を忘れて困っていると、男の子がさりげなく教科書を貸してくれる。

それから2人は仲良くなり、やがて好き合うようになる。

それでも、女の子は自信がない。
「私なんか、彼と釣り合わない」

だけど男の子は「俺が好きなのは君だけだよ」と最高の笑顔を与える。

そして2人は、固い絆で結ばれる・・・

そんな赤い糸の物語。

この現実の世界にも本当にあるのかな？

うん、あるのかもしれない。

でも、私には関係ない。

ううん、途中までは関係ある。

途中？

ううん、プロローグだけなら関係ある。

そう、プロローグだけなら・・・

「はじめまして、私、ひらやまのぞみ平山望」

私の前の席の女の子が、私に振り返って自己紹介してくれた。
小柄で細くって、ちょっと上がった目尻が印象的な女の子。

私はその平山さんよりもっと小柄で、でもぽっちゃりしてる。
顔も特徴がなくてすごく地味。

「冴えない女の子」の典型だ。

「あ、は、はじめまして。いーいしまひな飯島雛子です。よ、よろしく・・・」

私は小さな声で、つつかえつつかえ挨拶を返した。

「雛子って呼んでいい？私のことも望でいいから」

「は、はい。じゃあ・・・望、ちゃん」

「うん、よろしくね。雛子」

望ちゃんは口角を上げて、ニツと笑った。

今日は、私立朝日ヶ丘高校の入学式。

都内とは思えないほど緑豊かな丘の上のこの高校は、まだ新しいけど私立高校の中じゃ結構レベルが高い。

私は中学校時代、特に遊んだり部活に熱を上げたりすることもなかったので、

勉強くらいしかすることがなかった。

お陰で成績は結構よかったけど、無理して受けた公立高校に落ちて、ここに入学することになった。

何がなんでも公立に行きたかった訳じゃないけど、

私立ってお金持ちでおしゃれな人ばかりのイメージだから、友達ができるか心配だった。

でも、取り合えずこうやって望ちゃんという友達ができた。

それに・・・

私はさりげなく、後ろの方の席を見た。

一番後ろから2番目の廊下側の席。

そこに背の高い男の子が座っていて、

周りには、何人かの男子と女子が群がってる。

みんながみんな中学校からの友達って訳じゃないだろうに・・・人気者なんだな。

そうだよね、あんなにかっこいいんだもん。

私は、まだ名前も知らないその男の子に一目惚れしてしまったのだ。

入学式が始まる前、廊下で彼を見た瞬間、時間が止まったみたいだった。

整った顔立ちに、抜群のスタイル。

でもツンとしてなくて、人懐っこい笑顔。

本当に少女漫画に出てくる王子様みたいだ。

私は一目で虜になってしまった。

自分是一目惚れなんてするタイプじゃないと思ってた。

一目惚れするようじゃなかったいい男の子は絶対私のことなんて見てくれないだろうし、

そもそも、私は男の子を外見で好きになることなんてなかった。

・・・って言っても、今までまともに人を好きになったこともないけど。

じゃあこれって、私の初恋、なのかなあ・・・

それが一目惚れなんて、すごく意外。

だけど自分に呆れながらも彼から目が離せない。

本当にかっこいい。

私も彼も同じ1年1組。

それだけでじゅうぶん幸せ。

私が後ろを振り返った姿勢のまま、また彼から目を離せなくなっている、

彼がふと私の方を見て、目が合った。

ど、どうしよう！

私は慌てて、目を逸らした。

・・・見てるの、ばれちゃったかな・・・？

恐る恐る、もう一度彼の方をしてみる。

彼はもうこっちを見ておらず、友達とおしゃべりをしていた。

そうだよね。私を見たわけじゃないもんね。

「あはは」

突然、望ちゃんが笑った。

「え・・・何？」

「雛子、三浦君のこと好きになったの？」

「え・・・三浦君？」

私は思わず顔を赤らめた。

「あの廊下側の席の背の高い男の子。三浦君って言うんだって」

三浦君・・・

「入試、2位だったんだよ！」

「え。2位！？」

すごい！

この朝日ヶ丘高校の入試で2位なんて！

「1位はさっき入学式で、新入生代表で挨拶してた女の子だけど。もし三浦君が1位で挨拶してたら、一気にファンが増えてただろうな！」

望ちゃんはそう言って、三浦君の方をうつとりと見た。

・・・望ちゃんもその「ファン」の一人らしい。
って、私もだよな。

ファン、とかそういうつもりはないんだけど・・・
三浦君からみたら、やっぱりただの「ファン」、だよな。

あんな素敵な人に憧れても仕方ない。

どうせ私は三浦君とは一言も話せずに、1年が終わるんだ。

そして2年になってクラス替えがあつて、三浦君とは別々のクラスになる。

三浦君は私の名前も覚えずに卒業するんだろう。

第2話 学級委員

「飯島さん」

え？

望ちゃんと学食から戻っておしゃべりしてたら、突然頭の上から声が降ってきた。

「飯島さんて、クラスで何の係もしてないよね？」

「・・・」

私は金魚みたいに口をパクパクしながら、ただ頭を縦に振る。

「じゃあ俺と一緒に学級委員やらない？さっき先生に、『男子は前がやれよ。女子も選んどいて』、
って丸投げされて困ってるんだ」

「・・・」

「あ。もちろん、嫌ならいいけど」

今度はブンブンと頭を横に振る。

「や、やります・・・!」

「ほんと？ありがとう、助かるよ。1年間、よろしくね。で、早速
なんだけど、放課後仕事があるから、
ちよつと残ってもらってもいい？」

「は、は、はい!」

私と望ちゃんは、去っていくその後ろ姿を呆然と眺めた。

「・・・ちよっと、雛子。いつの間に三浦君と仲良くなったのよ？」

望ちゃんがジロツと私を睨む。

「さあ・・・」

仲良くも何も、三浦君と話したことなんて一度もない。

まだ、昨日始業式があったところだし、席も離れてるから、私の存在なんて知らないはずなのに。

だけど・・・

私は、両手で両頬を押さえた。
熱い。

「雛子ってば、真っ赤」

「う、うん」

「いいなー、三浦君と学級委員なんて！」

望ちゃんは本当に羨ましそうだ。

ど、どうして私を選んでくれたんだろう？

何の係もやってなくて、もっとかわいい女の子なんてたくさんいるのに。

望ちゃんだってそうだ。

だけど、どんな理由であれ、嬉しい。

学級委員なんてしたことないけど、頑張ろう。

「これを、ホッチキスでとめればいいから」
「う、うん」

放課後。

三浦君と私は誰もいない教室で、向かい合って座っていた。

目の前には大量のプリント類。親への年間行事予定や連絡のようだ。1種類ずつ、計4枚を1セットにしてホッチキスで左端を止める。それをクラスの人数分、38セット作ればいいらしい。

いくら不器用な私でも、これくらいはできる。

でも出来上がった物を見ると、何故か三浦君が作ったのと私が作ったのはまるで別物だ。

三浦君が作ったのは角がきちんと揃ってるし、ホッチキスの角度も全て同じ。

一方私が作ったのは・・・なんて言ったらいいのか、とにかく統一性に欠ける。

しかも三浦君のペースは私よりかなり早く、このままだと半分以上どころか、

4分の3くらい三浦君に作ってもらうことになりそう。

はあ、頑張るって決めたのに。

せめても、と思い、私は無言で一心不乱に頑張った。

「あはは、そんなムキになってやらなくていいよ」

「でも・・・このままじゃほとんど三浦君に任せちゃうことになるし・・・」

「じゃあ、俺がもう少しゆっくりにやるよ」

そう言って三浦君はペースを落とした。

お陰で私もちよつと余裕を持ってできるようになった。

でもそうになると、今度は沈黙が重い。

な、何か話さなきゃ。

三浦君、退屈だよね？

こういう時に面白い話とかできれば、三浦君とももっと仲良くなれるかもしれないのに。

私って、やっぱりつまなくて冴えない子だ。

けどとにかく私は頭をフル回転させて、何か三浦君に関係する話を思い出そうとした。

・・・そうだ！

「三浦君、入試2位だったんだってね。凄いね」

でも、私がそう言ったとたん、それまで穏やかな表情だった三浦君が急に無表情になった。

「そう？」

「え？だ、だって・・・2位だよ。頭いいんだね」

「1位じゃないけどね」

もちろんそうだけど、1位でも2位でも凄いことには変わらない。
だけど三浦君は面白くなさそう。

もしかして1位を狙ってたのかな？

だったら、悪いこと言っちゃった、かも。

「う、ごめんね」

「何が？」

「えっと、」

私が言葉に詰まってる、三浦君は思い直したようにまた穏やかな表情になった。

「早く終わらせて、帰ろう」

「う、うん」

・・・はあ。

私ってどうしてこうなんだろう。

三浦君が私のことを気に入ってくれるなんて思ってたんだけど、
せめて嫌われないようにしたいのに。

このままじゃ、それすら無理だ。

結局それから私はずっと無言のまま作業を続けた。

第3話 凄い人

「次の文法の問題は――、飯島」

え？

ぼんやりとしていて授業を聞いていなかった私は焦った。

6月に入り、ポカポカして眠かったのもあるけど、少し自分の人となりについて考えていたのだ。

入学してもう2ヶ月も経つのに、私には友達らしい友達は望ちゃんしかない。

望ちゃんは他にも友達がたくさんいるけど、学食には望ちゃんと私の2人で行くから、

望ちゃんの友達と友達になる機会もない。

もちろん望ちゃん以外の女の子とも話すけど、一緒に帰ったり遊んだりなんてしない。

学級委員の仕事がある時は三浦君と話すけど、事務的な内容ばかり。

あとは・・・そうだ、溝口君。

男の子の友達なんて、今まで一人もいなかったけど、溝口君とはたまたま帰る方向が同じで、

なんとなく話すようになった。

それでも、もし溝口君が明るくてよくしゃべる男の子だったら、私はろくに口もきけなかったと思う。

溝口君はバレー部で、凄く大きくて物静か。

一見近寄り難いんだけど、話してみると穏やかでいい人だ。

溝口君は三浦君とも仲がいいみたい。

って、今はそれどころじゃない！

どうしよう、先生が今、どの問題をやってるのかもわからない！

私がオタオタと教科書をめくっていると、右隣からスツと教科書が差し出された。

見ると、高山奈々ちゃんと言う女の子が、黒板の方を見たまま私に自分の教科書を渡してくれている。

こそつと受け取ると、教科書の真ん中辺りの問題に赤丸がつけてあり、答えも書いてある！

「ええつと・・・空白のところに入るのは、『would』です・・・」

問題文すら読んでないから、当ってるのかわからなかったけど、とにかく高山さんが教科書に書いてくれてある通りに言った。

「はい。じゃあ、次の問題は、遠藤」

先生が黒板に「would」と書き、授業を進める。

・・・よかった。

私は息をついて、高山さんにまたこっそり教科書を返した。

「おい。遠藤！聞いているか!？」

「・・・」

「遠藤！」

「・・・へ？」

私の左隣の男の子が、机から顔を上げた。

「明るくてよくしゃべる男の子」代表の遠藤君。
彼も三浦君と仲がいい。

よく、三浦君と溝口君と3人である。

・・・どうやら爆睡してたらしい。

「遠藤！しばらく立っとけ！」

「ふぁーい」

遠藤君は全く堪えていないようで、立ったまま今にも眠ってしまい
そつだ。

すごいなあ。

でも、私も高山さんが助けてくれなかったら立たされてたかも。
私は心底ホッとした。

「高山さん。さっきは本当にありがとう。助かったよ」
「ううん。どういたしまして」

授業中はさすがにお礼を言えなかったから、休み時間に高山さんにお礼を言つと、
高山さんはカラッとした笑顔でそう言ってくれた。

高山さんはいつも髪を全部後ろで一つにくくっていて、おでこ全開。そしていつもサバサバしてて、かわいい顔してるんだけど、女っぽいつていうより男前って感じ。

そして。

「高山さんて、英語の成績凄くいいよね。発音も綺麗だし」

「あー、私帰国子女なの。アメリカで生まれて5年くらい住んでたんだ」

「え！？そうなの！？」

「うん。国籍もアメリカと日本の両方持ってる」

うわあ・・・

「それより。飯島さん、大丈夫？なんか最近ボーっとしてること多いよね」

「あ、うん。大丈夫。ちょっと考え事してたから・・・」

「そうなんだ。もしかして三浦のことでも考えてた？」

「・・・え」

私が固まると、高山さんはお腹を抱えて笑った。

「『どうして私が三浦君のこと好きなの知ってるの！？』って顔してるね。

飯島さん見てたら、誰でもわかるよ？」

「そ、そうなんだ・・・」

私は赤くなって俯いた。

もしかして、三浦君本人も気づいてたりするのかな・・・？

三浦君人気は凄い。

1年の女子の間ではもちろん、先輩達の間でも大人気だ。
ルックスのよさは言うまでもなく、

人当たりもいいし優しいし、笑顔がとっても素敵だ。

すでに三浦君に告白した人も何人かいて、みんな振られてはいるんだけど、

三浦君はその振り方も優しいらしく、「振られたけど惚れ直した！」
って人が続出だ。

そんなモテモテの三浦君だから、

私なんかにかかれてると知ったところでどうってことないだろうけど・・・

でもやっぱり、もし気づかれてたら、恥ずかしくて死にそう。

そう思ったことも顔に出たのか、高山さんは言った。

「んー、多分三浦は気づいてない、と思う、よ」

「そうかな」

「たぶんね。あ、私、三浦と同じ中学だったんだ」

「！！」

それで三浦君のこと呼び捨てなんだ。

三浦君と同じ中学校だから、何か凄いわけじゃないんだけど、
私には「すごい」ことだ。

帰国子女で英語ペラペラで、アメリカ人で日本人で、しかも三浦君と同じ中学！

高山さんて凄い！

「・・・何が凄いの？私、なんの努力もしてないじゃん」

高山さんは苦笑いしながら言った。

「うっん！凄いよ！あ、でも私がしてた考え事は三浦君のことじゃないの」

「じゃあ何？」

「・・・私って、友達少ないなあ、と思って」

「はああ！？あははは」

高山さんはまた大爆笑した。

第4話 女の子たち

高校生になって3ヶ月ちよつと。

最初の頃は、いかにも「中学出たてです！」って感じだった1年生も、

みんな高校生っぽくなってきた。

特に女の子。

みんなメイクに目覚めて、お昼ご飯の後はこぞってトイレでメイク直ししてる。

望ちゃんも例外じゃない。

でも・・・私は例外。

すっぴんだし、耳くらいの長さのボブも櫛でといただけ。

望ちゃんに「眉毛くらい整えなよ」と言われて眉毛カットだけはたまにするけど、

やってもやらなくても変わらない。

髪がまとわりつくのが嫌でリップやグロスもしない。

だからお昼ご飯の後、望ちゃんがメイク直ししてる時は暇だ。

トイレの中は混んでるし・・・先に一人で教室に戻ってようかな。

そう思いトイレから出ると、

少し離れたところに三浦君が立っていた。

・・・一人じゃない。

女の子と一緒だ。

私みたいにすっぱんだし、髪も真っ黒。

でも私と違うのは、凄く美人ってことだ。

背も高くってスラッとしてて、長くて綺麗な髪が艶々と輝いている。

あれは確か、3組の月島さんつきしまって女の子。

入学式の日、新入生代表で挨拶をした入試1位の才女だ。

才色兼備って彼女のような人のことを言うんだろう。

私とは正反対。

そうだ、三浦君もかつこよくて頭もいいから才色兼備だ。

なんてお似合いな2人なんだろう。

月島さんは、三浦君が手に持っている教科書を指差しながら何か話している。

三浦君は「うんうん」と言う感じで頷く。

どうやら三浦君が月島さんに何か勉強のことで質問しているらしい。

「あー。そういうことか！わかった。ありがとうな、月島」

三浦君はいつものキラキラした笑顔。

遠目にも眩しいくらい。

「どついたしまして」

月島さんはクールビューティな笑顔で三浦君にそう言つと、3組の教室の方へ歩いて行った。

姿勢が良くって歩き方も上品。

彼女の周りだけ、なんか空気が違う。

月島さんとああやって気軽に話せる男の子なんて、三浦君くらいだろう。

三浦君を見ると、月島さんの後姿を目で追っている。

・・・もしかして三浦君、月島さんのこと好きなのかな・・・

そうだよ、あんなに素敵な人だもんね。

そうは思っても、胸がざわめき、苦しくなった。

私も月島さんの方を見る。

月島さんはちょうど3組から出てきた女の子と、教室の入り口でおしゃべりしている。

さっき三浦君に見せたクールビューティな笑顔じゃなくて、もっと砕けた感じの笑顔の月島さん。

あんな風にも笑うんだ。

きつと、一緒におしゃべりしている女の子は、月島さんの親友なんだろう。

2人は手を振って別れると、月島さんは教室の中へ、もう一人の女の子は私の方へ向かって歩いてきた。

トイレに入るのかな、と思ったけど、その女の子は三浦君の前も私

の前も通り過ぎると、
階段を下りて行った。

私はなんとなくその子から目が離せなかった。

1年生にはかわいい女の子はたくさんいる。

月島さんも美人だし、

月島さんと同じ3組の藍原さんあいはらって言う子なんか、アイドル並みの
かわいさで、

遠藤君はじめ、たくさん男の子が熱を上げている。

今私の前を通り過ぎた女の子は、西田さんと言う子だ。

西田さんは月島さんのように美人、ってわけじゃないし、

藍原さんのようにすごくかわいい、ってわけでもない。

だけど、何故か目を引く女の子なのだ。

小さくて（私よりは大きいけど）、元気で、いつもニコニコしてい
て・・・

なんとなく全体的に「かわいい雰囲気」なのだ。

でも男の子に媚びたりすることがなくて、女の子から人気がある。

だから私も思わず目で追っちゃったんだけど・・・

西田さんの姿が見えなくなつて、私はもう一度三浦君の方を見た、
と。

三浦君と目が合った。

—— 違う。

三浦君は私と同じ方向を見てたのだ。

だから私が三浦君の方を見たとき、目が合ったのかと思った。

三浦君、

西田さんを見てたんだ。

その三浦君の表情は今までに見たことがない物だった。

少しぼんやりとしていて、それでいて切なげで・・・

三浦君はいつまでも西田さんが歩いていった方向を見ていた。

第5話 片思い

「飯島、どうかした？」

「え？」

「ぼーっとしてる。って、いつもか」

「・・・ひどい」

私は電車の中のポールを握った。

吊革は届かないのだ。

逆に、吊革じゃ低すぎて持ちにくい溝口君は、吊革をつるしてあるポールを握っている。

言わずもがな、私が握っているそれとは違う。

今日はたまたま溝口君と帰りの電車が一緒になった。

最近は、溝口君は部活で帰りが遅かったから久しぶりだ。

「三浦のことでも考えてた？」

・・・ちよつと前に高山さんにも同じこと言われたような。

あの時の答えは「NO」だったけど、今は「YES」だ。

「私って、三浦君のこと好きそう？」

「好きそう」

「・・・そんなにわかりやすい？」

「わかりやすい」

「・・・」

溝口君が、目だけでニコツと笑った。
これが溝口君の笑い方だ。

「・・・でも、三浦君って3組の西田さんのこと好きなんだね」
「あれ。意外と敏感なんだな」
「敏感も何も」

あんな顔の三浦君見たら、誰でもわかるよ。

「あ。そっか。私でも気づくってことは、みんな気づいてるんだ？」
望ちゃんも気づいてるのかな。

「うん。みんな知ってる。知らないのは西田さん本人くらいじゃない？なんか鈍そうだし」

「・・・確かに。西田さんってそういうこと鈍感そう」
「飯島に言われたくないと思うけどな」

それはそうかもしれない。

それにしてもこんな風に男の子と平気で話せるのって、溝口君が初めてかも。

溝口君が遠慮なく、でも優しく話しかけてくれるからかもしれない。

「私、最初、三浦君は月島さんのことが好きなのかと思ったけど、違うんだね」

「・・・うん・・・どうせ誰かから聞くだろうから言っとくと、三浦のやつ、入学式の時に西田さんに一目惚れしたらしい」
「・・・そうなんだ」

私が三浦君に一目惚れした時に、三浦君も西田さんに一目惚れしてたんだ・・・

三浦君と両思いになれるなんてもちろん思ってたけど、やっぱり三浦君に好きな女の子がいるって聞くと胸がキュッと締め付けられる。

せめて他の高校の女の子ならよかったのに・・・

三浦君と西田さんが付き合ったりしたら、毎日2人が一緒にいるところを見なきゃいけないんだ。

「西田さんは、三浦君のことどう思ってるんだろう・・・」

「噂だと、他校に彼氏がいるらしいよ」

「・・・へえ」

でも、三浦君みたいに素敵な人に告白されたら、西田さんも揺らぐかもしれない。

・・・いいなあ、私もそんな悩みを持ってみたい。
一生、縁がないと思うけど。

「・・・」

「溝口君？」

「あ、何？」

溝口君が急に口を噤んで窓の外の景色を見てたから声をかけると、なんだか焦ったように私を見下ろした。

「・・・もしかして、溝口君も西田さんのこと好き、とか？」

「ち、違っって!」

珍しく動揺してる溝口君。

さては凶星？

すごいなあ、西田さん。

「本当に違うよ。俺が好きなのは・・・その・・・」
「え？誰？」

私は思わず背伸びして、溝口君に近づいた。

「・・・」

「言つてよ！私が三浦君のこと好きなの知ってるくせに」
「だから。それもみんな知ってるって」

「・・・」

「・・・わかったよ。あの、さ・・・月島だよ」
「――」

「なんだよ？」

「う、ううん・・・」

月島さん？

あの才色兼備の？

あのクールビューティな？

「溝口君。また、凄い人に惚れたね」

「・・・うん。中学校が同じでさ」

「じゃあずっと？」

「・・・」

「告白、したことあるの？」

「まさか。月島は俺に興味なんてないし。ってゆーか、男に興味ないみたい」

あー・・・そんな感じかも。

「ま、ぼちぼち頑張るよ」

「そっか・・・頑張ってね」

すると溝口君は肩をすくめた。

「飯島もだろ」

「私は別に頑張らない。三浦君に振り向いてもらおうなんて思っていないし」

「欲がないなあ」

「身の程を知ってるだけ。三浦君には西田さんと幸せになってほしいの」

嘘じゃない。

そりゃ、ちよつとは辛い。

でも、私なんか人を本気で好きになれたのは三浦君のお陰だ。だから、三浦君には感謝してる。

三浦君には幸せになってもraitたい。

西田さんの彼氏ってどんな人なんだろう？

他校の人だったら、私がその人を見る機会はないだろうけど、三浦君より素敵な人なのかな？

それとも告白されてなんとなく付き合ってるだけなのかな？

できれば三浦君のことを見てあげてほしいな。

第6話 お誘い

三浦君の、西田さんへの片思い。
溝口君の、月島さんへの片思い。
遠藤君の、藍原さんへの片思い。

そして私の、三浦君への片思い。

どの片思いも一向に進展しないまま、時間だけが流れた。

だけど2学期が始まって少し経った頃のこと。
事態は急変した。

事の起こりはある放課後のこと。

この日は、学校で保護者の集まりがあるとかで授業が終わると同時に生徒達は一斉に帰らされた。

下足室も校舎の入り口も大混雑。

帰宅部の私と、陸上部の望ちゃんは普段は帰る時間が別々だけど、今日は一緒に駅まで行くことにした。

「あ！三浦君だ！」

校舎を出たところで、望ちゃんが三浦君と溝口君が2人で校庭を校門に向かって歩いているのを見つけた。

「ねえ！雛子って溝口君と仲いいよね！？話しかけてよ！」
「え」

大興奮の望ちゃん。

でも、三浦君と溝口君、なんか2人で楽しそうに話してるし、
なんかわざわざ割り込むのも悪いな・・・

でも望ちゃんは私の腕をぐいぐい引っ張って、三浦君たちのすぐ後ろまで来てしまった。

ここまで来てしまえば、逆に声をかけないほうが変だ。
まるでつけてるみたい。

私は仕方なく小さな声で溝口君を呼んだ。

「・・・溝口君」

「？ああ、飯島」

ごめんね。そういう思いで溝口君の目を見る。

溝口君は私の思っていることがわかったのか、「いいよ」と言ってみて笑った。

三浦君も私に気づいて足を止める。

「飯島と平山さんも今帰り？一緒に駅まで行く？」

「うん！行く！」

望ちゃんが元気良く答える。

私はまだ少し戸惑ってたけど、三浦君と話せるチャンスだ。

溝口君に感謝して三浦君に話しかけようとしたけど、望ちゃんが三浦君の横にべったりくっついてて、

とてもじゃないけど話しかけられない。

私は居場所がなくってどうしようかと困ってたら、
溝口君が「仕方ないなあ」と言う感じで私の横に並んでくれた。

三浦君と望ちゃんは、私の方を振り向くことなく校門へ向かった。

その時、校門の辺りが騒がしくなった。

何だろう。

三浦君も立ち止まる。

私は、三浦君の後ろから顔だけ出して校門の方を見てみた。

そこには・・・西田さん？

校門を少し出たところで、西田さんが誰かと話している。
ううん、話してるって感じじゃない。

言い合ってる・・・ていうか、喧嘩してる。

私はもう少し顔を出して、西田さんが喧嘩している相手を見た。

えっ。

私は固まった。

私だけじゃない。

三浦君も溝口君も望ちゃんも、そしてその場の生徒全員が固まって
その光景を見ている。

西田さんが喧嘩しているのは、男の人だった。

どこのかわからないけど、朝日ヶ丘のじゃない制服を着ている。それより何より・・・凄い。金髪だ。

背も大きくて、顔も強面。

私的には不良の典型って感じ。

でも西田さんは全く臆することなく、その男の人に凄い勢いで何かを言っている。

男の人も言い返してるけど、西田さんは怯まない。

だけど。

西田さんが急に涙ぐんだ。

言い込められて泣いてしまった訳ではなくて、何か思いつめたような・・・

見ていてこっちが切なくなってしまうような表情だ。

そして男の人が西田さんの腕を掴みどこかへ引っ張って行ってしまった。

2人の姿が見えなくなつて、緊張の糸が切れたかのように、周りにざわめきが戻ってきた。

みんな口々に、「今の、女の子はうちの1年？男の方、凄かったね」

「こわーい」

「彼氏なのかな？」「まさかー」とか言ってる。

「あれ、3組の西田穂波ちゃん、だよな？」

望ちゃんも、三浦君の気持ちを知ってるはずなのに、わざと三浦君に訊ねる。

三浦君は「そうみたいだね」と素っ気無く答えた。

その翌日のこと。

「飯島」

私は学食でお盆を手はどこに座ろうか迷っていると、突然三浦君に声をかけられた。

今まで聞いたことのないような、明るい三浦君の声。

びっくりして思わず立ち止まったけど、その理由はすぐにわかった。

三浦君は、西田さんと月島さんと3人でご飯を食べていたのだ。

でも・・・

昨日、あの後、三浦君はいつも通りの笑顔で望ちゃんと話してたけど、

私の目にはすごく不機嫌に見えた。

それなのに、今日はこの上機嫌。何かあったのかな？

「な、何？三浦君・・・」

「来週の創立記念日、学校休みだろ？みんなで遊園地行くんだけど、一緒に来ない？」

遊園地？

「遠藤達と行くんだ。女子は月島と、西田さん。藍原さんも来てくれるかも」

「えっ・・・月島さんと、西田さん」

私は思わず声に出した。

どうして私がそこに入るんだろう・・・

西田さんとも月島さんとも藍原さんとも話したことないのに。

西田さんと月島さんは微妙な表情をしている。

2人の考えてることはわからないけど、少なくとも私が三浦君を好きなのは知ってるみたい。

断った方がいいかな・・・いいよね？

三浦君と遊園地に行ってみたって気持ちはある。

でもどうせ、三浦君が西田さんと話してるのを見て、落ち込むんだって諦めもある。

どうしよう。

その時、三浦君たちの向こうで望ちゃん自分が自分を指差し「私も行きたい！」と、

私にアピールしてるのが目に入った。

結局私は、三浦君に「行く」と返事してしまった。

第7話 月島さん

「穂波！あれ、乗ろう！」

「ジェットコースター？うわ！面白そう！」

明るくて元気な藍原さんと西田さん。

早速ジェットコースター目掛けてダッシュした。

でも、西田さんは「しまった！遠藤君は藍原さんと一緒にいたいはずだ！」と言わんばかりに振り向き、

「遠藤君って絶叫系好き？一緒に行く？」と遠藤君に訊ねた。

遠藤君はもちろん大喜び。

西田さん達の方へ走ろうとして・・・遠藤君も思い出したらしい。
この遊園地へ来た目的を。

「三浦も好きだろ？行こーぜ」

よく晴れた行楽日和の平日。

私達は東京のお隣の県にある大きな遊園地へやってきた。

絶叫系が好きらしい藍原さんと西田さんは大張り切り。

でも絶叫系が大の苦手な私は、例えば三浦君が一緒でも西田さん達と行動したいとは思わない。

それに・・・

「飯島。俺達と一緒に行こう」

三浦君、遠藤君、藍原さん、それに何故か月島さんのことを気にしつつ去って行った西田さん、
を見送った後、溝口君が私を誘ってくれた。

「うん。ありがとう。そうさせて」

どうやら月島さんも絶叫系が苦手らしく、残っている。
それに望ちゃん。

望ちゃんは絶叫系が苦手というより、田中君という男の子に捕まっている。

本当は三浦君たちと行きたかったみたい。

後は、小関君という男の子。

男の子は全員1組だ。

私が話したことがあるのは三浦君と溝口君だけだけど。

私は望ちゃんと田中君を見た後、溝口君を見上げた。

溝口君は肩をすくめる。

なるほど。田中君は望ちゃん狙いなね。

昨日、溝口君から今日の遊園地の目的を聞いた。

どうやら男の子たちは、それぞれ目当ての女の子にここで告白しようと思ってるらしいのだ。

三浦君は西田さんに、
遠藤君は藍原さんに、

そして田中君は望ちゃんに。

三浦君が私をここに誘ったのは、望ちゃんを連れ出したかったからなのだろう。

私と同じような立場なのが小関君。
どうやら田中君に無理矢理連れてこられたらしい。

「溝口君も頑張ってね」

私は小声でそう言って、月島さんの方を見た。

「・・・うん・・・でもなあ」

「なんのためにここに来たのよ」

溝口君もだけど、それに輪をかけて月島さんは遊園地なんて苦手そうだ。

せつかくの機会なのに、逃す手はない。

「ね。頑張って!」

「・・・俺よりさ。飯島は嫌じゃないのか?」

「え?」

「三浦が・・・その、西田さんに」

「・・・」

もちろん嬉しくはない。

もしかしたら今頃三浦君が西田さんに告白してるのかもしれないと思つと、

思わず俯いてしまう。

でも、やっぱり三浦君には幸せになってもraitai。

ただ・・・この前の金髪の不良さんは、西田さんのなんなんだろう？
噂の他校の彼氏なんだろうか。

「飯島さん。ちょっといい？」

突然、月島さんが私のところへやってきた。

溝口君がちよつと緊張したけど、

月島さんは、他の4人に声の聞こえない距離まで私の腕を引いていった。

もしかして、私が溝口君と話してたから怒ってるのか・・・？
どうしよう・・・

でも、そうなら、溝口君にとってはいい事だよね？

だけど月島さんの口から出た言葉は私の想定の外だった。

「ごめんなさいね」

「え？」

「三浦君に代わって、お詫びするわ」

三浦君に代わって？？

何のことだろう。

「飯島さん。本当は今日こんなとこに来たくなかったわよね？」

三浦君と穂波が一緒にいるところなんて見たって楽しくないもんね」

・・・それは、そうだ。

「だけど三浦君に誘われて、仕方なく来たんだよね？・・・三浦君って結構酷いよね」

ああ。それで「ごめん」なんだ。

私は慌てて首を振った。

「そんな！月島さんが謝らないで。三浦君も、私の気持ちを知らないから・・・」

「知らない？そうなの？こんなにバレバレなのに？」

・・・やっぱり、バレバレなんだ。

「でも、それはそれで罪よね。鈍すぎる」
「・・・」

な、なるほど。そういう考え方もあるのね。

「鈍いと言えば穂波も。さっきの穂波の顔、見た？」
「え？」

そう言えば、月島さんのことを気にしながら三浦君たちとジェットコースターの方へ行ったけど・・・

「多分、穂波は三浦君が私のことを好きだと勘違いしてるの」
「ええ？」

って、私も一瞬そう思ったけど。

「穂波としては、きつと、今日は私と三浦君をくつつけるつもりで来たのよ。」

だからさっき、私と三浦君が別行動になりそうで焦ってたんだと思う」

「・・・」

「『飯島さんには悪いけど、私は和歌に幸せになつてもらいたい！』とか何とか、

きつと勝手に張り切ってるのよ。あ、和歌って私ね。そういえば自己紹介がまだだったわ。」

私、月島和歌です。よろしくね」

・・・なんだか物凄く面白い人だなあ、月島さんて。なんか、イメージ狂う。

月島さんはため息混じりに首を振った。

「ほんと、ごめんなさいね、色々。飯島さんは何も悪くないのに嫌な思えばっかりさせて。」

もつと三浦君に怒ってもいいのよ？」

「そ、そんな・・・とんでもない」

「穂波にも。穂波って、悪い子じゃないんだけど、ちよつと鈍くつて、ちよつとおつちよこちよいで、

ちよつと先走り屋で、ちよつとお節介で、ちよつとバカで、ちよつといい加減なのよね」

・・・。。

それは「良い子」なのだろうか「悪い子」なのだろうか。

でも。

月島さんは本当に西田さんに呆れているようだけど、それでいて、西田さんへの愛情を感じる。

月島さんは西田さんのことが大好きなんだ。
信賴してるんだ。

きっと西田さんも。

私はなんだか羨ましくなり、三浦君のことも忘れて、
「全く、もう!」とか言ってる月島さんを眺めた。

第8話 待つよ

本当に本当に本当に、溝口君には申し訳ないんだけど、その日一日、私は月島さんを独占した。

だって、月島さんて本当に面白い。

本人は至って真面目なんだけど、言ってることが的を得すぎて面白。

溝口君が好きになった理由が良くわかる。

「ねえ。この前校門のところで西田さんが喧嘩してた人って西田さんの彼氏？」

「ああ、噂になってるわね。私は見てないんだけど。金髪の大きな人だった？」

「うん。すごく怖そうな人だった」

「じゃあ間違いなく穂波の彼氏さんね」

やっぱり。

「私も会ったことないんだけど、見掛けによらず、悪い人みたい」

見掛けによつてると思いますが。

「でも、穂波にはとても優しいんだって。あー．．．だけど、それも穂波がそう言ってるだけだから．．．」

もしかしたら、全然優しくもないのに、穂波が『優しい』って思い込んでるだけなのかも。

穂波ならありえるわ」

ありえるんだ。

「ただね」

月島さんが急に真面目な顔になった。

ううん、ずっと真面目な顔で面白いこと言ってたんだけど、急にしんみりした表情になったのだ。

「飯島さんにはいい話じゃないかもしれないけど・・・穂波とあの彼氏は、来年になったら別れるの」

「えっ・・・どうして？」

「彼氏さん、今年生んだけどね、3月に卒業したら遠くへ行っちゃうんだって」

「・・・」

「やりたいことがあるんだって。夢を追いかけて行く訳だから、穂波も泣いてたけど『応援する』って」

もしかして、この前喧嘩してたのはその事が原因なのかもしれない。でも今日の西田さんはいつものキラキラした笑顔だった。

彼氏が夢のために遠くへ行ってしまう。

だからもうすぐ別れないといけない。

だけど、西田さんはああやって笑顔で頑張ってる。

自分のためにも彼氏のためにも。

・・・西田さんて、凄い。

ただかわいいだけの女の子じゃないんだ。

そうだよ。だから三浦君があんなに夢中になるんだ。

あ・・・三浦君。

もし、三浦君から告白されたら西田さんはどうするんだろう。

月島さんの話だと、西田さんは彼氏のことを凄く好きみたいだ。

でも、別れると分かっているんだったら、三浦君を振ったりするかな？

今は振ったとしても、三浦君が待っていれば、3月になれば付き合うかもしれない。

西田さんだって、彼氏と別れて一人なのはやっぱり寂しいだろうし。

どう、なるんだろう・・・

日が落ちた真つ暗な道。

私はそこを三浦君と2人で歩いていた。

遊園地から全員で学校の近くの駅まで戻ってきたけど、そこからは男の子が女の子を送っていくことになった。

私は、当然三浦君は西田さんを送って行くんだと思ってた。ところが突然、小関君が「西田さんを送っていく」と言い出し、

結局三浦君が私を送っていくことになったのだ。

・・・三浦君、怒ってるかな？不機嫌かな？
どうしよう。謝ったほうがいいかな・・・？

そう思って、隣を歩く三浦君を見上げたけど、三浦君は気の抜けた
ような表情をしている。
どうしたんだろう。

「・・・三浦君？」

「え？何？」

ハッと我に返ったように、三浦君が私を見た。

「あ、ううん。あの・・・三浦君。本当は西田さんを送っていき
かったんじゃないの？」

「え」

三浦君は一瞬表情を強張らせたけど、すぐにため息をついた。

「なんだ。飯島も、俺が西田さんのこと好きって知ってるんだ」

「・・・うん」

「実は、今日西田さんに告ったんだけど、」

胸が音を立てた。

覚悟してたこととは言え、やっぱり苦しい。

でも三浦君はそこで沈黙した。

「・・・」

「・・・ダメだった、の？」

三浦君は無表情に私を見た。

「なんでそう思うんだよ」

「三浦君、なんか元気ないから」

「・・・ふーん」

三浦君はちよつと歩調を速めた。

それまでは私に合わせてくれていたのかゆっくりだったけど、今は自分のペースで歩いてるって感じた。

私は慌てて小走りした。

こうしないとついていけない。

「彼氏がいるんだって。でももうすぐ別れる、って言うから、俺待つよ」って言ったら、困ってた」

「困ってた？」

「『待つててもらっても、三浦君と付き合っ気になれるかどうか分からない』ってさ」

そうか。それで小関君は三浦君と西田さんが2人にならないように気を使って、

自分が西田さんを送ると言い出したんだ。

「・・・それでも待つのか？」

「待つよ」

三浦君はキッパリと言った。

第9話 諦めきれない

「・・・はい」

お昼休み。

私は学食から戻ると、溝口君に缶コーヒーを差し出した。

「何、これ？」

「・・・お詫び」

「お詫び？」

「私、昨日、遊園地で月島さんを独占しちゃったから」

すると溝口君は笑いながら缶コーヒーを受け取った。

「ちょうどコーヒーが飲みたかったから、これはもらうよ。でも結果的には、ああしてくれてよかった」

「よかった？」

なら返してね、と言う前に、溝口君はわざと急いでプルトップを引いて、

コーヒーを飲み干した。

・・・早い。5秒もかかってない。

「昨日の帰り、俺、月島に告白したんだ」

「ええ！」

確かに、月島さんは溝口君が送っていったけど！

「ええ！つて、昨日の集まりはそれが目的だし。飯島だつて頑張れ
つて言つただろ？」

「言つたけど・・・」

うわあ・・・溝口君、本当に頑張つたんだ・・・

「そ、それで、どうだったの？」

ちよつと寂しげに微笑む溝口君を見れば結果なんて分かつてるのに。
私つてなんてデリカシーがないんだろつ。

「振られたよ」

「・・・そう・・・残念だつたね」

「うん。でも最初から分かつてたし」

「あ。男の人に興味なさそうつて言つてもんね、溝口君」

「うん。自分が誰かを好きになつたり付き合つたりしてるのなんて
想像できないらしい」

溝口君は笑つた。

私もつられて笑つ。

なんか月島さんらしい答えだ。

あんなに綺麗な子なのに、きつと自分が綺麗だとは思つてないんだ
ろつ。

ちよつとその気になれば、凄くモテるだろつに。

「・・・諦めるの？」

「うん。諦めたいけど、まだちよつと無理かな」

「そうだよね」

そんな簡単に諦められるんだったら、初めから好きになってないよね。

私もそうだ。

三浦君が西田さんのことをどんなに好きか知ってるのに、諦められないでいる。

「三浦もダメだったんだよな。遠藤も」

「遠藤君も？」

「いや、遠藤は告白すらしてないって。あいつ、そういうこと平気そうなのに、全然ダメらしい」

い、意外だ。

遠藤君なら冗談交じりにさらっと「好き」とか言いそうなのに。

相手が藍原さんだから緊張しちゃうのかな。

つまり、遠藤君も本気ってことなんだ。

「うまく言ったのは田中だけかあ」

「そうね・・・え？田中君？」

「聞いてない？平山と付き合うことになったらしいぞ」

聞いてない！

私は大急ぎで、席で友達とおしゃべりしている望ちゃんのところへ行った。

「の、望ちゃん！」

「雛子。なあに？」

「あ、あの、田中君と・・・」

「ああ。うん、付き合うことにした」

ニコツと笑う望ちゃん。

周りの友達も既に知っているらしく、「いいよねー」と口々に言った。

「でも・・・望ちゃんて三浦君のこと・・・」

「だって、三浦君て西田さんのこと好きなんでしょ？」

他の女の子を好きな人なんて、いつまでも想ってても仕方ないし。彼氏ほしいしー」

「・・・」

「雛子も、いい加減三浦君のことは諦めた方がいいわよ？どうせいずれ西田さんと付き合っただろうから」

そう、だけど。

私がそれ以上何も言えずにいと、望ちゃんたちは「メイク、直しに行ってくるねー」と、トイレへたってしまった。

望ちゃんの言ってることはもつともだ。

私も溝口君も、いつまでも望みのない片思いをするより、他の人を見たほうがいいのかもしい。

でも・・・

「ふふ。諦めきれない、って顔、してるね」

「高山さん……」

自分の席で、私達の会話を聞いていたらしい高山さんが話しかけてきた。

「そうよね。片思いでも、諦められないものは諦められないよね」

そうだ。

私もさっきそう思ったんだった。

「まあ、それは三浦も同じみたいだけど。西田さんて彼氏いるんでしょ？」

「うん」

「あの三浦が片思いねー。なんか笑っちゃう」

「え？」

「あいつ、昔から凄いいモテたから。片思いなんかしたことないんじゃない？」

そっか。そうだよな。

いつものようにケラケラと明るく笑う高山さん。
でも、どこか何かが違う気がした。

「……もしかして、高山さんも好きな人がいるの？」

「えっ？」

「片思い？」

高山さんは急に真っ赤になり、視線を落とした。
いつもは男前な感じなのに、今はなんかしおらしい。

「わあ。。。」

「・・・お互い辛いね」
「そうだね」

第10話 100メートル走

校庭の土の上で、体育座りをしながら、私は少し離れたところにいる三浦君を見た。

ちょうど100メートル走を終えた三浦君は、汗をぬぐいながら、遠藤君たちと楽しそうにおしゃべりしている。

私の横には、私と同じように体育座りしている西田さん。

今日の体育の授業は1組と3組混合の100メートル走テストだ。1学期にやった同じテストのタイム順にグループが作られてるんだけど、

私と同じグループということは、西田さんもかなり足が遅いらしい。

あれ？

西田さんの頭が、私と同じ方向を向いている。

・・・三浦君を見てるんだ。

私、西田さん、三浦君、の順で一直線上にいるから、私からは西田さんの表情は見えない。

私みたいに三浦君に見とれているんだろうか？

それって・・・西田さんも、三浦君が気になるってこと？

私は膝を抱える腕に力を入れ、足とお腹の間に顔を埋める様にした。でも、どうしても気になって、目だけは三浦君と西田さんの方へ向けた。

その時、三浦君が西田さんの方を見た。
たまたまじゃないだろう。

三浦君は西田さんがどこにいるかちゃんと分かっている、振り向いたんだ。

三浦君が西田さんに微笑みかけた。
西田さんの髪が少し揺れる。
たぶん、微笑み返したんだろう。

まるで2人の間に特別な空気が流れている気がして、
それを邪魔しちゃいけない気がして、
私は息を止めた。

「はい、次のグループ並んで！」

先生の声がして、西田さんも私も慌てて立ち上がりスタートラインに並ぶ。

西田さんは私に少し微笑むと、前を向いてスタートの姿勢を取った。

「位置について！用意、スタート！！」

ピーッ！！

100メートル走なんて大嫌いだけど、スタートしてしまったからには一生懸命走るしかない。

私は夢中で前だけを見て走った。

でも、すぐに3人の女の子の背中が遠ざかっていく。

ああ、またビリだ・・・

・・・ん？3人？

このグループ、5人1組だったはず・・・

後の1人は？

思わず少し振り返ると、なんと私のだいぶ後ろに西田さんの姿が。

お、遅い。遅すぎる。

私より足の遅い人、初めて見たかも。

なんかもう「ポテポテ」と言う音が聞こえてきそうなテンポだ。とても全力疾走しているようには見えない。

それに、なんだかペースも少しずつ落ちてきているような・・・

え？

少しずつどころじゃない。

西田さんのペースは急速に落ち、ついには歩き出してしまった。
そして・・・ピタッと足を止め・・・

ドサー!!

「西田さん!」

西田さんが倒れた!!

私は叫んですぐに足を止め、西田さんの方へ駆け寄った。
でも、それより早く、月島さんが西田さんのところへ辿り着いた。

「穂波!! 穂波!!」

月島さんが急いで西田さんの肩を起こしたけど、
西田さんは全く反応しない。

私は、西田さんの傍に来たものの、どうしていいか分からず呆然と
立ち尽くした。

「穂波! 起きて!」

西田さんの顔は蒼白だ。

でも、それ以上に月島さんは真っ青。

こんな月島さん、初めてだ。

「月島！飯島！どいて！」

体育の先生が西田さんを地面に寝かせて、脈を取る。

月島さんは自分の左胸をギュツと押さえ、息をするのも苦しそうだ。

「・・・うん、大丈夫だ。脈も呼吸もしっかりしてる。ただの貧血だろう。保健室に運ぼう」

「ああ・・・よかった・・・穂波・・・」

月島さんは、ヘナヘナと西田さんの横に崩れ落ちると、涙ぐみながら西田さんの頭をなでた。

「ごめんね、穂波。朝から元気なかったのに・・・もっとちゃんと見ててあげればよかった・・・」

こんなときなのに、私は月島さんから目が離せなくなった。

いつもはクールビューティな月島さんが、こんなに取り乱すなんて。

私、誰かのためにこんなに必死になったことってあったかな？

その時。

「西田さん！」

三浦君・・・

走ってきた三浦君が、西田さんの横にかがみこんだ。

そして。

西田さんをふわっと抱き上げた。

それはもう、本当に「ふわっと」。

私、

漫画で、かっこいい男の子が女の子を空気を抱くかのように軽々とお姫様抱っこをするのを見て、

「どんなに軽い女の子だって40キロくらいはあるんだから、そんなふわっと抱けるわけない」って
思ってた。

だけど三浦君は、今私の目の前で、それをやっている。

私は、それが三浦君と西田さんだと言うことも忘れて、思わず見とれた。

「俺、保健室に連れて行きます」

「ああ、三浦。頼んだぞ」

「待って！私も行きます！」

三浦君と月島さんが一緒に、西田さんを保健室へ連れて行った。

西田さん・・・

あんなにあの2人に想われてるんだ。

もし、私が倒れたら、あんなに心配してくれる人はいるんだろうか。

第11話 怒り

なんだろう。

私は暗くて寒い廊下を急いだ。
すっかり秋も深まって、まだ遅くないのにもう真っ暗だ。

今朝、突然三浦君に「放課後、話がある」と、使っていない教室に来るように言われた。
でも、三浦君から私への話なんて、内容が全く想像できない。
学級委員のことならわざわざ呼び出さなくてもいいだろうし・・・

4階の一番奥の小さな教室。

ここは、基本的には使われておらず、
入試の時の面接とか、特別な授業の時にだけ使われる。
私も、入るのは2回目だ。

私はそつと扉を開いた。

中は明かりがついておらず、まだ三浦君は来てないみたい。

・・・寒い。

エアコンはないけど、せめて電気だけはつけておこう。

そう思い、壁に手を這わせて電気のスイッチを押した。

「！三浦君！」

「・・・飯島」

ビックリした。

教室の中に三浦君がいたのだ。

真っ暗な中、一番後ろの窓際の机の上に、足を組んで座っていた。

「三浦君・・・どうしたの？明かりもつけずに」
「・・・別に」

無表情な三浦君。
機嫌が悪いらしい。

今日の昼間、1組ではいつもの三浦君だったのに。

「あの・・・話って何？」

放課後、好きな男の子に呼び出される・・・
って、ロマンチックな状況なのかもしれないけど、
とてもじゃないけどそんな甘い雰囲気じゃない。

私は、何故か怒られるような気がして身構えた。

三浦君がボソツと言った。

「西田さんに振られた」

「・・・」

「待つのもダメだってさ。彼氏のことしか考えられないらしい」
「・・・」

「なんでだろーな。どうせ、別れるのに。別れてから俺と付き合えばいいのに」

「・・・」

「ま、そもそも俺のことが嫌いなのかもしれないけど」

「そんなことないと思う！」

三浦君は右目だけ細めて私を見た。

「そんな・・・三浦君のことを嫌いな人なんていないよ」

「そう？」

「うん・・・西田さんは、ただその彼氏のこと大好きなだけだよ」

「ふーん」

「あの・・・残念だったね・・・でも、三浦君なら、」

ガタツ！！

突然三浦君が、机を蹴るようにして立ち上がり、私の方へ大股で近寄ってきた。

相変わらず無表情だけど、凄く怖い。

私は思わず、壁を背にして身を縮めた。

三浦君は私のすぐ目の前で止まった。

「三浦君なら、何？」

「・・・」

口調は穏やかだけど、明らかに怒ってる。
私は口を開けなかった。

「俺なら、すぐに彼女ができるって?」

コクコクと頷くしかできない。

「そうかもな」

三浦君は吐き捨てるように言った。

「でも、飯島。お前、口ではそんなこと言ってるけど、本当はいい
気味だとか思ってたんだろ?」

「!そ、そんなこと・・・!」

「ない?でも内心、喜んでんだろ?好きな男が失恋したんだから、
飯島には絶好のチャンスじゃん!」

・・・怖い。

言葉遣いも顔つきも、私の知ってる三浦君じゃない。

足が震える。

「いつもは『私、三浦君が幸せならそれでいいわ』みたいな顔して
るくせに、

いざ俺が振られたら、嬉しいのかよ!?」

「・・・」

「飯島も他の女も所詮そんなくだんねー人間なんだよな!」

「・・・」

「残念だったね、なんて思ってもいないこと言いやがって！！ム力つくんだよ！！！」

三浦君は大声で怒鳴ると、教室から出て行った。

私は・・・床に座り込み、泣くことしかできなかった。

第12話 当たり前

三浦君人気は凄い。

だから、そんな三浦君が嫌っている人間のことは、
みんなも自然と避けるようになるわけで・・・

三浦君は、別に私に冷たくするとか、私のことを悪く言つとか、そんなことはしてない。

ただ、私と目を合わさない。
ただ、私の存在を無視する。

私も怖くて話しかけられない。

みんなもそんな空気を感じ取り、私から離れていった。

望ちゃんも、もう一緒に学食に行ってくれないし、話しかけてもくれなくなった。

あの日、家に帰ってから、三浦君の言ったことをよく考えてみた。
三浦君は何も間違っていない。

私、三浦君に西田さんと幸せになつて欲しいとか言いながら、
三浦君が西田さんに振られたら、もしかしたら私のことを見てくれるかもしれない、なんて、

ありえない期待をどこかでしてた。

実際、三浦君が振られたと聞いたときも、さすがに「いい気味」とは思わなかったけど、

ホッとしなかったと言えば、嘘になる。

私にわざわざあんなことを言ったのは、きつと私、無意識のうちに三浦君に「いい気味」的な態度を取ってたんだ。

三浦君が怒るの、当然だよな。

私は机でサンドイッチの袋を開けた。

さすがに一人で学食に行く気にはなれず、こつやつて購買で買って食べている。

最初の頃はすごく寂しくて涙が出そうだったし、人目が気になったけど、人間慣れるものだ。

その時、溝口君が私と同じ購買の袋を手に、私の横の席に座った。

「飯島。一緒に食べていい？」

「・・・溝口君」

「今日、昼休みに入ってすぐ部活でちょっと集まりがあつて。学食に行きそびれたんだ」

「そうなんだ」

そう。

みんな私から離れていったけど、
本当にありがたいことに、唯一溝口君だけは、今まで通り話しかけてくれる。

それでいて、相変わらず三浦君とも仲がいい。

不思議な人だ。

「まだ一人で食ってるんだな」

「うん。もう1ヶ月くらいかな。慣れちゃった」

「こんなことに慣れるなよ」

「・・・そう、だよね」

ああ。今日始めてしゃべったかも。

なんか口が上手く回らない。

溝口君はおにぎりを袋から取り出しながら言った。

「・・・三浦とは相変わらず？」

「うん。相変わらず」

溝口君にだけは事情を話してある。

って、他に私の話を聞いてくれる人なんていないんだけど。

「そつか・・・こんな状況、辛い？」

「辛いけど・・・仕方ない。私が悪いんだもん」

「飯島が悪い？俺はそうは思わないけど」

「でも、三浦君の言ってることは当たってるもん」

「・・・」

溝口君は何か考え込んでいたけど、急におにぎりをパクパクと食べ

ると、立ち上がった。

「飯島。ちょっと行こう」

「え？」

「三浦のどこ」

「ええ・・・いいよ、もう」

正直、もう三浦君に近づきたくない。

あんなことがあって、三浦君のことを好きじゃなくなったから、
ならいい。

むしろ逆だ。

あんなことがあったのに、私はまだ三浦君のことを諦めきれない。
あれほどはつきりと嫌われたのに・・・

だから、三浦君に下手に近づいてまた冷たくされるのが怖い。苦し
い。

誰に避けられるよりも、三浦君に軽蔑されるのがイヤ。

私って本当に馬鹿だ。

でも溝口君は、私の手首を掴んでグイグイと引っ張って廊下を歩く。
みんな、「アノ飯島に何の用なんだ？」という目で溝口君を見る。

・・・イヤだ・・・恥ずかしい・・・

私は顔を伏せて、溝口君の影に隠れるようにして歩いた。

「三浦」

頭の上から溝口君の声がした。

「何？」

続いて、前の方から三浦君の声。
学食から帰ってきたようだ。

「ちょっと話があるんだけど」

「話？なん・・・」

急に三浦君の声が途切れた。
私に気が付いたらしい。

「・・・なんだよ、話って」

三浦君の声のトーンが変わる。

「あっち、行こうぜ」

溝口君がまた私を引っ張って歩き出した。

「なんだよ、こんなとこまで来て」

不機嫌な三浦君。

ここは校庭の隅っこで人目にはつかないけど、校舎から随分離れている。

でも、三浦君が不機嫌なのは、お昼休みに「こんなところまで」つれて来られたからだけじゃないだろう。

「三浦。飯島ってお前になんかしたのか？」
「別に」

「だったら、なんで避ける？自分が飯島を避けたら、他の生徒も飯島を避けるようになるって分かってて、飯島のこと無視してるんだろ？」

「そんなことない」

三浦君はそう言ったけど、溝口君の言葉は正しいような気がした。

「とにかく。理由がないなら、飯島を避けるな。仲良くしなくてもいいけど、普通に挨拶くらいはしろよ」
「うるさいな」

三浦君は溝口君を睨んだ。

教室じゃ絶対見せないような顔だ。

でも溝口君は見慣れているのか、全く動揺しない。

それに私も・・・なんかこういう三浦君を意外だと思わなくなってきた。

「なんかムカつくんだよ」

溝口君が笑った。

呆れたような笑いだ。

「お前さ。ムカつくからって無視するのかよ？ガキだなー」
「なんだと？」

三浦君が溝口君にグツと近づく。

「だってそうだろ。嫌いな人間に対しても、最低限の礼を持って接するのが大人だろ」

「・・・話はそれだけか？俺、もう行くからな」

そう言う三浦君は、早足で校舎の方へ戻って行った。

「・・・はあ」

「あはは、どうしたんだよ、飯島？」

脱力した私を見て、溝口君が笑った。

「・・・寿命が縮まった」

「ムカつくって言われたから？傷ついた？」

それはもちろんいい気はしないけど、そうじゃない。

「よく三浦君にあんなこと言えるね・・・溝口君で怖いもの知らず」
「三浦は友達だから『怖いもの』じゃない」

え？

「そうだけど・・・嫌われたらどうしよう、とか思わないの？」

「思わない。友達だからこそ、間違ってることは間違ってるって言
ってやりたいし」

当たり前のように言う溝口君。

でも私は、その「当たり前」のことに、強い衝撃を感じた。

第13話 友達

私は昨日のお昼休みからずっと、
溝口君の言っていたことを頭の中で繰り返していた。

「友達だからこそ、間違ってることは間違ってるって言ってやりた
いし」

そう、だよな。

それって当然だよな。

でも、私、今までそんなことしたことあったわけ？
そんなことされたことあったわけ？

溝口君のその言葉に、100メートル走の時倒れた西田さんを心配
していた月島さんの姿が重なる。

私、今まであんなに誰かを心配したことってあったわけ？
心配されたことってあったわけ？

答えは全部「NO」だ。

今はこんな状況だから仕方ないにしても、
これから先、私にそんな友達ってできるんだろうか。

昨日の午後、私はずっと冷や冷やしていた。
お昼休みのことのせいで、三浦君と溝口君が気まづくなってしまっ

たらどうしようと、心配していた。

でもそんな心配は無用だった。

最初のうちは、三浦君は少し溝口君を避けてたみたいだけど、溝口君がいつも通り三浦君に話しかけるから、

三浦君もいつの間にか「いつもの教室での三浦君」になってた。

きっと三浦君と溝口君が本当の友達だからだろう。

2人はどうやって友達になったんだろう？

中学は違うから、高校で友達になったんだよね？

西田さんと月島さんだって・・・

友達ってどうやって作るんだろう。

そう言えば、入学式の後、望ちゃんに声をかけられて、望ちゃんと私は友達になった。

今は、私がみんなに避けられてるから望ちゃんも私に近づきにくいのか、

話せなくなっちゃったけど・・・

よし。

私は購買で買ってきたおにぎりを握り締めて、辺りを見回した。誰か、いないかな・・・

でも、見回すまでもなく、すぐに「標的」を発見した。

高山さんだ。

高山さんは、お弁当を持ってきているので学食には行かず、お昼休みは本を読みながら一人でご飯を食べている。

（しかも、英語の本）

2学期の初めに席替えがあつて席が離れたから、最近はあまり話してないけど・・・

私は思い切つて、席を立ち、高山さんのところへ歩いて行つた。

「あ、あの、高山さん・・・」

「・・・何？」

本から顔を上げた高山さんは、私を見て微妙な表情をした。

「あ。ご、ごめん・・・本読んでるのに邪魔しちゃつて」

「そんなことないけど」

「・・・そうか。」

みんなに避けられている私と話すのが嫌なんだ。

そうだよね・・・

私は高山さんにもう一度謝つて、席に戻ろうとした。

「え？待つてよ、飯島さん。何か話があるんじゃないの？」

「そういう訳じゃないの。ただ・・・ううん、ごめんね。なんでも

ない」

「そうなの？でもちようどよかった。私、飯島さんに言わなきゃいけないことがあって。」

よかったら一緒にお昼食べない？」

ええ？

「あ・・・うん」

私は拍子抜けして、高山さんの前の席に座り、高山さんの方を向いた。

高山さんも本を閉じて机の中にしまう。

「ごめんね」

「へ？」

「ずっと、謝ろうと思ってたんだけど、なかなか言い出せなくて。特に最近、みんなが飯島さんのこと避けてて私もなんとなく・・・」

「いいよ、そんなの」

私が高山さんの立場なら、私も同じことしてたと思う。

でも私は、こうやって高山さんみたいに謝る勇氣はきつとない。

「あれ？ずっと謝ろうと思ってたって、そのこと？」

「ううん。違うの。三浦のこと」

三浦君のこと？

私が首を傾げていると、高山さんは周りを気にして少し小声で言った。

「前、私、飯島さんに、三浦は飯島さんの気持ちに気づいてないと思う、って言ったよね？」

「え？うん」

「あれ、嘘なんだ。三浦は飯島さんの気持ちに気づいていると思う。あいつ、そういうことに関してはかなり敏感だから」

「ああ・・・うん、そうみたいだね・・・」

もう振られたけど。

「私、そうだと分かってたのに、飯島さんに嘘ついた。ごめんね」

「そんなこと気にしなくていいよ・・・でも、どうして？」

「飯島さんの夢、って言うか、三浦に対する憧れを壊しちゃかわいそうかなと思ったから」

「憧れ？」

「うん。あいつさ・・・ちょっと二重人格なんだよね」

二重人格！

なんだか頭の中のモヤが晴れた気がした。

そうか、「二重人格」。

私、なんとなく「教室での愛想のいい三浦君」と「私や溝口君の前での無表情で怖い三浦君」って

勝手に分けてたけど、それって三浦君が二重人格ってことなんだ！

なんか、こうやって一つの言葉になると、

三浦君と言う人間がよく分かった気がする。

そうかあ。三浦君って二重人格だったんだ。

私が一人勝手に納得していると、高山さんが言葉を続けた。

「中学校の時ね、三浦に振られた女の子がいたんだけど、その子、振られた後もしつこく三浦に付きまとってたの。そしたら三浦、急にその子に冷たくなって

無視するようになって・・・いつの間にか他の生徒もその子のこと無視しだして、

結局その子は卒業まで誰も友達ができなかった」

「そうなんだ・・・」

「飯島さん見てて、その子のこと思い出したの。だからやっぱりちゃんと三浦が本当はどんな人間か、話さなきゃって思ってたんだけど・・・ちょっと遅かったかな。本当にごめんね」

しよげ返る高山さん。

でも私は思わず笑ってしまった。

「どうして高山さんがそんなに謝るの？高山さんは何も悪くないのに・・・」

悪いのは、三浦君が二重人格って気づけなかった私、っていうか、気づいてたのに、それでもまだ好きな私が悪いんだよ」

「え？気づいてたの？しかも、まだ好きなの！？」

高山さんは口をあんぐりと開けた。

「飯島さんて・・・馬鹿ね」

「うん。自分でもそう思う」

「それに『どうして高山さんがそんなに謝るの？高山さんは何も悪くないのに』って、

飯島さんも、いつも自分が悪くないのに謝ってばかりだと思うけど？」

「えっ……」

私はちよつとムツとした。

私、そんなに謝ってばかりの人間じゃないもん。

「謝ってばかりだよ」

「違うもん」

「特に三浦に対して」

「……」

「いつまでもあんな変な男に惚れてたら時間の無駄よ」

「……変じゃないもん」

「変よ。飯島さんも」

「……」

高山さんは笑いながらお弁当の蓋を開けた。

第14話 奈々

「し、信じられない・・・！！！！！！」

青筋って本当に立つんだなあ。

「三浦、飯島さんにそんなこと言ったの！？なに、あいつ、何なの！？何様のつもり！？」

王子様、かなあ？

「二重人格どころの騒ぎじゃないじゃない！！ジギルとハイドよ！！」

それってつまり、二重人格ってことじゃないのかなあ。

「これからは、あいつの事、『裏・三浦』って呼んでやる！」

ウラミウラ・・・語呂悪いなあ。

「ちょっと、飯島さん！！聞いてる！？」

「え？はい？あ、うん。聞いてるよ、一応」

確かに聞いてたけど。

私が三浦君に何を言われたかを知って、激怒する高山さん。面白すぎる。

そんな青筋立てて怒らなくても。

「怒るわよ！しかも、そんな三浦をまだ好きって言う飯島さんにも腹が立つ！」

「・・・そんなこと言わないでよ」

「もっといい男の子なんてたくさんいるわよ！遠藤君なんてどう！？」

「え。遠藤君？ちょっと苦手かも・・・溝口君は話しやすいけど」
「み、溝口・・・クン？」

三浦君と仲の良い遠藤君と溝口君。

その繋がりで溝口君の名前を出したただけなんだけど、高山さんは何故か激しく動揺した。

「そう、ね。溝口君はいい人だと思うよ・・・。うん、飯島さん、溝口君にしといたら？」

「でも、溝口君、好きな人いるし」

あ！

そういえば、前、高山さんも片思いしてる言ってたけど、それってもしかして！

「高山さんの好きな人って、溝口君？」

「・・・」

「・・・つぶ」

「・・・何よ？」

高山さんが真つ赤な顔でジロツと私を睨む。

「うつん。それはまた・・・望みのない片思いをしてるね」

「飯島さんに言われたくないんだけど」

「・・・それもそうね。あ、そうだ」
「何？」

「ねえ、高山さん。お願いがあるんだけど・・・私とお友達になつてくれない？」

「望みのない片思いをしている者同士。あ、もちろん、最初は普通のお友達からだけど」

私がそう言うつと高山さんは怪訝な顔をした。

「普通のお友達から、って・・・飯島さん、私と恋人同士になりたいの？」

「まさか！」

「てゆうか、私、飯島さんは友達だと思つてただけ」

「・・・え？そうなの？私って、高山さんの友達なの？」

私、いつの間に高山さんの友達になつてたんだろう？

高山さんは大きくため息をついた。

「飯島さんの『友達の基準』って何なの？」

「え？えーと・・・名前で呼び合う、とか、かな？」

「わかった。これから飯島さんのことは『雛子』って呼ぶね。私のことは『奈々』でいいわ」

「ほんと！？ありがとう！これで私と高山さん、じゃなかった、奈々はお友達ね！」

高山さんはまたため息をついた。

「私、高山奈々ちゃんとお友達になったの!」

帰りの電車の中、胸を張って溝口君にそう言つと、
溝口君も、さっきの奈々のように怪訝な表情をした。

「・・・だから?」

「私に友達ができたの!」

「・・・それはよかったな」

「どうして喜んでくれないの?」

「いや・・・めでたいな」

イマイチな反応の溝口君。
どうしてだろう。

「どうしてって・・・友達ができてそんなに嬉しい?」

「嬉しい!特に今は」

「・・・そっか。そうだな」

溝口君は少し納得したように、微笑んだ。

「なんかね、奈々とは凄く仲良くなれそうな気がするの。ピピッと
来たの」

「恋人みたいだな」

「うん。男の子だったら好きになってたかも」

二重人格じゃないしね。

「奈々ってとってもいい子よ。ちょっと口は悪いけど」

「ふーん」

「そう思わない？」

「思っても何も、俺、高山と話したことないし」

「そうなの？」

じゃあ、どうして奈々は溝口君のことを好きになっただろう。
私みたいに一目惚れしたのかな？

「いつか奈々と一緒にデートしてみたいなあ・・・」

「やっぱり高山と恋人同士になりたいのか」

「そういう意味じゃなくって。私と奈々にそれぞれ彼氏ができて、
4人で一緒にデートがしたいってこと」

「ああ、そういうことか」

奈々の相手は溝口君だったらしいのにな。
そしたら私も気楽だ。

私の相手は・・・誰なんだろう。

三浦君のことは好きだけど、さすがにそれは望めない。

「溝口君。私と一緒に失恋しようよ」

「もうしただろ」

「諦めよう、ってこと。一緒に新たな恋を探そうよ！」

「・・・なんだ、飯島。やけに積極的だな。なんか気持ち悪いぞ」

第15話 俺と・・・

「一緒に帰ろうよー?」

「今日は用事があるから待ってらんない」

「友達と一緒に帰るものだよ?」

「・・・どこの小学生よ」

奈々は呆れて笑った。

「今日は本当に急ぐの。ごめんね」

「デート?」

「雛子・・・怒るわよ?」

もうちょっと奈々をからかっていたかったけど、私も今からしなきゃいけないことがあるので、仕方なく「バイバイ」になった。

あれ以来、私と奈々は本当に「友達」になった。

今までほとんど話していなかったのが不思議なくらい。

お昼ご飯も毎日一緒に教室で食べてるし、

何より奈々は、

「飯島さんとあんまり仲良くしないほうがいいよ」と言う友達に怒って、

いつも私と一緒にいてくれるようになった。

お陰で奈々は私同様、みんなから避けられてるけど、そんなことは全然気にしてないみたいだ。

そんな奈々を見ると、私も三浦君やみんなに避けられてるのなん

てどうしてもよくなってきた。

だって、奈々と話しているだけでじゅうぶん楽しいし、溝口君も今まで通り話してくれる。

この前溝口君に「溝口君も、私の友達みたいだね」って言ったら、「今更？」とか言って何故か呆れてたけど・・・

「友達」って難しい。

でも、今の私にはそれ以上に難しい事がある。
目の前のプリントの山だ。

来月・・・つまり、来年の1月・・・にある、
寒中ウォークラリーの行動予定表や当日の持ち物が書かれたプリントたち。

これを38セットにまとめて、明日配らないといけない。

学級委員の仕事だ。

三浦君に嫌われてしまっただけから、学級委員の仕事は私一人でやっている。

その方が気楽だし、自分のペースでできる。

寂しくないことはないけど・・・

今三浦君と2人きりなんて、息が詰まりそう。

きつちりとプリントの角を揃えてホッチキスで止める。
1セット作るのに約2分。

この分じゃ、全部終わるのに1時間以上かかる。

でも、いいや。

別に急ぐ必要もない。

せっかくだし丁寧にやろう。

そう言えば、1学期の初めにも三浦君と同じ作業をやったな。

三浦君は器用で、あつと言う間に1セット作っちゃうんだよね・・・

「飯島」

・・・え？

聞き覚えのある声に驚いて、教室の扉の方を見た。
そこには・・・

三浦君。

「何？」

私はできるだけ動揺を隠してそう言った。

上手く隠せたと思う。

完璧に普通だ。

・・・あれ？

私、今、動揺したのかな？

随分、あっさり「普通」にできたけど。

三浦君もちよつと驚いたようで、
何も言わないまま私に近づいてきた。

そして私の前に座ると、プリントを揃え出した。

「いいよ。私がやるから」

「これ、学級委員の仕事だろ。俺の仕事でもある」

「・・・ふふ」

「・・・なんだよ？」

「いいよ、今更。大丈夫。一人でできるから」

三浦君は明らかにムツとした表情になった。

でもこんな三浦君も見慣れたせい、怖くない。

それどころか奈々が言ってた「裏・三浦」を思い出して思わず笑ってしまった。

「だから。なんで笑うんだよ」

「ふふ、うつん。なんでもない」

どうやら今は裏・三浦モードらしい。

私しかないから、当然か。

だけど三浦君は私の言葉を見殺しして、プリントを揃え続けた。

「相変わらず、上手だね」

「飯島は相変わらず下手だな」

「・・・」

「先生に学級委員の仕事任された時、面倒くさいから、俺のこと好きでなんでも言うこと聞きそうな飯島を誘ったのに、全然使えなくて、すげーガッカリした」

そっか。それで私に「一緒にやろう」って誘ってくれたんだ。

一人で喜んじゃって・・・私ってほんと、馬鹿だなあ。

「とろいし、不器用だし、つまんねーし」

「・・・だよな」

不思議と、前に三浦君に「ム力つく」と言われたときほど、堪えなかった。

ううん、全然気にならない。

私なんかを誘った三浦君に同情しそうな勢いだ。

「・・・なんで、そんな面白そうなんだよ」

「三浦君も、人を見る目が無いなあ、って思ってた」

「・・・そうだな。もっと使える奴を選べばよかった」

それからまた三浦君はしばらく黙っていたけど、ふと呟いた。

「飯島。俺のこと怒ってないのかよ？」

「どうして？」

「あんなこと言われて・・・みんなにも避けられて」

「怒ってないよ。むしろ感謝してる」

「感謝？」

「うん。お陰で奈々と・・・高山さんと友達になれたから」

「高山？ああ・・・そう言えば最近一緒にいるな」

知ってたんだ。

「俺、あいつ苦手」

「お互い様だと思うよ」

「・・・」

三浦君が私を睨む。

だから。そんなことしても怖くないって。

「あんな奴とつるむなよ」

「あんな奴、って・・・それに、私、今は他に友達いないし。どうしてそんなこと言うの？

私が誰と仲良くしても、三浦君には関係ないでしょ？」

奈々のことを悪く言われて、私は思わず三浦君に強く言い返した。

三浦君も、まさか私にこんな態度を取られると思ってなかったのか、少し怯む。

でも、すぐに反撃してきた。

「うるさい。あんな奴、は、あんな奴、だ」

「だから、そんな言い方・・・」

「あんな奴とはつるむな。その代わり、」

「その代わり？」

「俺と付き合え」

第16話 ヒナコ

日本は銃の所持が禁止されていて本当によかった。

もし、禁止されていなかったら、今日この朝日ヶ丘高校の1年1組で、

確実に一人死者が出ていた。

「雛子。別に銃じゃなくても人は殺せるのよ」

「奈々・・・」

「ナイフ、持ってない？」

「持ってるわけないでしょ」

「紐でもじゅうぶんよ。後ろから回して首を絞めて・・・」

「奈々！」

「でも手頃な紐ってのもないわね。そうだ、石で殴ればいいわ。うん、そうしよう」

「・・・」

昨日三浦君に「高山と友達をやめて俺と付き合い合え」みたいなことを言われた、と、

奈々に言ったら、この始末だ。

爽やかな土曜日の朝だと言っのに。

「それで、なんて返事したの！？この期に及んで、泣いて喜んだ、とか言わないよね！？」

「な、泣いてないって・・・」

「じゃあ、喜んだの！？」

「喜んでもないって。最後まで話を聞いて！」

「何よ！？これ以上、何かあるの！？」
「だ、だから・・・」

三浦君曰く。

溝口君に怒られてから三浦君なりに色々考え、やっぱり私に対する仕打ちは酷かったと反省したらしい。

で、私の現状を何とかしようと考えた結果・・・

「『俺が飯島と付き合えば、みんなが飯島を見る目も良くなるだろう』って」

「な、な、な、な・・・」

「奈々」

「ちがーう！！何よ、それ！！！！」

「王子様」

「へ？」

「だって、『何よ、それ！』の後に『あいつ、何様！？』って言うと思つてたんでしょ？」

「・・・よく分かるわね、雛子」

奈々は感心したように言った。

その時、ちょうど当の三浦君が登校して来た。

私が止めるより早く、奈々が三浦君のところへすっ飛んで行く。

「三浦。ちょっとツラ貸しな」

・・・奈々・・・裏・三浦よりよっぽど怖いよ・・・

三浦君は、奈々の呼び出しに一瞬で裏・三浦に変身(?)した。
そして、さすがは裏・三浦。
ズル賢いことにかけては右に出るものはいない。

なんと、奈々が呼び出した体育館の裏(本当に喧嘩するみたい・・・)に、
溝口君を連れて現れたのだ。

「・・・どうして溝口君が一緒なのよ」

ワナワナを震える奈々に、三浦君は事も無げに言った。

「いやー、一人だと怖いからさあ」

「こ、この!!!」

だけど、奈々も大したものだ。
何故自分がここにいいのかさっぱり分かっていない溝口君に聞こえないように言った。

「溝口君がいるからって、私がしおらしくするとも思っただの?」

「・・・」

「舐めないでよね!」

奈々が急に大きな声になった。

「三浦! あんた、何様のつもり!? あ。王子様とか言ったら張り倒すからね」

.....

「優しい雛子に代わって私が言っておげる。あんた、酷すぎるよ。自分が振られたからって雛子に八つ当たりしたかと思えば、今度は『付き合え』って？何考えてるの？」

「ちよつとは責任取るうと思っただよ」

「だったら！もう雛子には近づかないで！」

奈々が、守るように私の前に立った。

でも三浦君は奈々の攻撃を何とも思っていないみたいで、ニヤニヤしながら言った。

「飯島って俺のこと好きなんだろ？だったら飯島も俺と付き合えたら嬉しいんじゃないのか？」

高山が『近づくな』って言っても、飯島は近づいて欲しいかもよ」

「雛子！どうなの！？」

今度は奈々の怒りの矛先が私へ向いた。

「ど、どうなのって・・・」

「三浦のこと、まだ好きなの？こんな奴のこと！？こんなエセ王子様野郎のこと！？」

「おい、高山。なんだそのエセ王子様野郎って」

うつ。

私が返答に困っていると、三浦君が勝ち誇ったように笑った。

「高山の負けだな。さっさと飯島から手を引け」

「ひ、卑怯よ、三浦。雛子の気持ちを利用して・・・」

その時。

「おいおい。ちょっとタンマ」

「溝口君・・・」

黙って私達3人のやり取りを聞いていた溝口君が、口を開いた。

「事情はなんとなくわかった。高山、理由はどうであれ三浦は飯島に『付き合おう』って言ったんだろ？」

「・・・『付き合え』よ。命令形」

「それはともかく。だったら、付き合うかどうかは飯島が決めたらしいだろ。それに、三浦」

「・・・なんだよ」

「飯島が誰と友達でもお前には関係ないだろ。飯島と高山が友達でも、お前は飯島と付き合えるんだし」

「・・・高山に近づきたくない」

「私だって！」

「彼女の友達だからって、三浦が仲良くする必要もないだろ」
「・・・」

三浦君と奈々は押し黙った。

「飯島」

「な、何？」

「で、お前はどうしたいんだよ？三浦と付き合いたいのか？」
「・・・」

どうなんだろう。

万が一、三浦君が私を好きだというのなら、付き合いたいけど、

こんな理由じゃ・・・

でも、せつかくの好意だから、断るのも悪いかな？

それに三浦君の考えが当たれば、私もまた友達ができるかもしれない。

そうだ。それに、奈々。

私のせいで、今は奈々までみんなに避けられてる。
奈々にいつまでもこんな思いはさせられない。

「・・・うん。付き合う、よ」

「よしよし、素直でいいぞ」

「雛子！」

三浦君と奈々が同時に言った。

「ダメよ、雛子！」

「でも・・・」

「どうせ、私に遠慮してるんでしょ！？私のことはいいから！」

「うるさい、高山。飯島が俺と付き合うつて言ってるんだから、飯島
島のことを尊重しろよ。」

お前、飯島の友達なんだろう？」

三浦君はまた勝ち誇ったような声を出した。

三浦君・・・もはや理由はどうであれ、私と付き合いたい、と言う
より、

奈々を言い負かしたいんじゃない・・・

奈々は、悔しそうに地団太を踏んだ。

けど。

何を思ったのか、急に冷静になった。

「分かったわ。雛子があんたと付き合うこと、認める」

「そりゃどーも」

「でも条件がある」

「条件？」

三浦君の顔が曇る。

「雛子のこと、名前で呼びなさいよ」

「名前？」

「そう。ヒ・ナ・コって」

「・・・」

「雛子は、仲のいい友達とかとは名前で呼び合いたいんだって。ね、雛子？」

そ、そうだけど・・・三浦君にそこまでしてもらわなくていいのに・・・

とは言え、そんな大した要求じゃないと思う。

なのに三浦君は何故か凄く不機嫌になった。

「イヤだ」

「はあ？彼女のこと、名前で呼ぶの恥ずかしいの？」

そう言えば、三浦って、中学の時何人が彼女いたけど、名前で呼んでたことないよね？」

奈々・・・それを知っててわざと三浦君をいじめてるのね？

「ねえ、雛子。名前で呼んで欲しいよね？」

「・・・うん」

「おい、飯島！」

本当はどうでもいいけど、私も少くらいワガママを言ってみたくなった。

本物の彼氏と彼女じゃないけど・・・そういの、憧れるし。

これでもし三浦君が「じゃあもういい」と言えばそれはそれでかまわない。

「・・・わかったよ」

三浦君がため息混じりに言った。

奈々は「よし！」とガッツポーズをする。

「練習しとく」

「」「何を？」「」

三浦君以外の3人がハモった。

第17話 藍原さん

翌日。

三浦君の練習の成果が発表された。

「ヒナ」

「ヒナ？」

「そう『ヒナ』にした」

・・・勝手にされても。

「『ヒナ』だったら、鳥のヒナだと思えば言えなくもない」

「・・・」

「飯島つて、本当に鳥のヒナみたいだしな。雀とかの」

「・・・」

私の前に座っている奈々はちょっと不満そうだったけど、諦めたのか三浦君に食って掛かることはしなかった。

「あ、あの。私は三浦君のことなんて呼べばいいの？」

するととたんに三浦君が赤くなった。

「普通でいい！今まで通りでいい！」

「えー・・・」

「わかったな！ほら、学食行くぞ！」

三浦君が、座っている私の腕を引っ張った。

「三浦！雛子は教室で私とお昼ご飯を食べるの。ほら、もう購買で買ってきてあるし」

「それを学食に持って行って食べばいいだろ。俺と飯島が付き合ってるってアピールしないと意味ないし」

「『飯島』じゃないでしょ」

「・・・ヒナ」

「よろしい」

そっか。そうだよな。

「三浦君と私が付き合えば、みんなの私を見る目も変わるかも」作戦なんだから。

「あ。高山は来なくていいからな」

「行くわよ！」

こうして何故か、私の右隣に三浦君、左隣に奈々、という並びで学食の席につくことになった。

実は私は左利きだったりするので、左隣に誰か座られると、お箸がぶつかって食べにくいんだけど・・・

「だから俺は右に座ってるだろ？」

得意げな三浦君。

「私を無理矢理雛子の左に追いやつといて、何言ってるのよー！」

「高山がついて来なけりゃいい話だ」

「あのね！」

どうでもいいけど、私を挟んで喧嘩しないで欲しい。

三浦君と私が一緒に「飯食べてるだけでも既に注目の的なのに、
ますます人目を惹いている気がする・・・」

「あれ？飯島に高山。どうしたんだよ」

何も知らない遠藤君が、いつも通りの軽い感じで三浦君の前の椅子
に座った。

「えっと・・・」

「遠藤。俺、飯島と付き合うことにしたから」

「へ？」

三浦君はそれ以上説明しなかったけど、遠藤君は「そうなんだー」
とか言つて、

特に不思議がるでも質問してくるでもなかった。

もっとビックリされるかと思ってただけど・・・まあいつか。

それから溝口君もやってきて、遠藤君の隣、つまり私の前に腰を下
ろした。

奈々の斜め前だ。

奈々がちよつと赤くなつて俯く。

・・・昨日の奈々を見られてるのだから、今更照れる必要もないと
思っただけど。

「お。さっそく彼氏・彼女やってるんだな」

「う、うん」

「なんか、色んな女子の視線が痛いな」

「うん。ごめんね」

「いや、別に、」

「そうだ!!」

突然、溝口君を遮って遠藤君が叫んだ。

「飯島！三浦の・・・俺の友達の彼女ってことは、飯島は俺の友達でもあるよな!？」

「えっ」

そうなんだろうか。

ロクに話したこともないんだけど。

三浦君は助けしてくれるつもりはないらしく、無言で食事をしてる。

「友達だったら、俺の頼み、聞いてくんない!？」

「え？頼み？」

「そう!」

私と奈々は顔を見合わせた。

「用って何？飯島さん」

放課後。私は3組の教室へ出向いた。
お昼休みに遠藤君に言われた「頼み」を果たすために。

なんてことはない。私に藍原さんとの仲を取り持って欲しいらしいのだ。

でも、はっきり言ってそんなの無理。

だって私、藍原さんと話したこともない。

前に一緒に遊園地に行ったけど、その時も藍原さんとは別行動だったし。

それに・・・こんなかわいくて人気のある人になんて、近寄り難い。

でも一応「友達」(?)である遠藤君の頼みなので、仕方なくやってきたんだけど、

やっぱりいざ藍原さんを目の前にするとどう取り持っていていいのかわからない。

取り合えず、遠藤君の話をしなきゃ。

「あのね、えん・・・」

「そうだ!!」

藍原さんが私を遮った。

あれ？さっきの遠藤君みたいだな。

案外この2人、似た者同士なのかも。

「ねえ、飯島さん。三浦君と付き合ってるってホント!？」

「うん」

って言わないと、ダメなんだよね？

それにしても情報早いな。

藍原さんは目を丸くした。

どうしよう・・・。「なんでアンタなんかが三浦君と!？」って思ってるのかな・・・

だけど、そうじゃないらしい。

「うわあ！おめでとう！飯島さん、ずっと三浦君のこと好きだったんでしょ？」

よかったねー！ついに想いが成就したんだ！」

「え、ええっと・・・成就って言うか・・・」

「いいなあ。羨ましい。私もそんな恋、してみたいなあ」

え？

「だって・・・藍原さんてモテるでしょ？恋なんていくらでも・・・」

「自分も本気で好きになった人と恋してみたいの！私、なんか中々本気で人を好きになることってなくて」

そうなんだ・・・ちょっと意外かも。

「あ、じゃあ、あの、遠藤君なんてどう？」

「遠藤？どうして？」

藍原さんは本当に不思議そうに首を傾げた。

そんな仕草もかわいくって、思わず見とれてしまう。

こんな純情な藍原さんに嘘はつけない。

「実は、遠藤君に、藍原さんとの仲を取り持って欲しいって頼まれたの」

「・・・」

「私になんか頼むのもどうかと思うんだけど・・・あ、つまりそれだけ遠藤君は切羽詰ってる訳で・・・」

「イヤ」

イヤ、ですか。

「遠藤のことがイヤなんじゃないの。どっちかと言えば好きだし」

「そう、なんだ」

「でも、もつと燃えるような恋をしたいの！片思いでもいいから！」

藍原さんは本気でそう言った。

「もし思いつきり恋をして、ばっさり失恋したら、出家する覚悟で遠藤と付き合ってもいいけど」

「いや、そんな覚悟はいらないと思うけど・・・」

「うーん。なんとなくなんだけど、もし遠藤と付き合ったりなんかしたら、別れられない気がするのよね」

「え？どうして？」

「だから、なんとなく。妙にしっくりきて『このまま付き合ってた方がいいか』ってなっちゃいそう」

それって、凄く相性がいいってことなんじゃ・・・

「だからその前に本気の恋をしたいの！」

もちろん、その恋が成就したら、遠藤のことなんて忘れちゃうだろうけど」

「・・・」

「って、遠藤に言っという。じゃあね」

藍原さんはそう言つと、廊下を歩いて行ってしまった。

第18話 クリスマスイブ

「・・・」

「・・・」

「・・・つぶ」

「・・・三浦・・・」

「だって・・・あははは！藍原らしいな。ははは」

翌日、私が「取り持ち」の結果報告をしたら、

遠藤君と溝口君、奈々は微妙は表情、

三浦君は大爆笑だった。

「つまり遠藤は、藍原と付き合うためには、

少なくとも一度、藍原の大恋愛を指をくわえて見てなきゃならないのか・・・あはは、面白いな、それ」

「面白くないだろ！『かわいそう』だろ！」

「いやー、かなり面白い」

ゲラゲラ笑う三浦君に、さすがの遠藤君もぷーっと膨れる。

私は、たとえば、なんだか遠藤君に申し訳なくって小さくなった。

「ヒナ。よくやった。ご褒美に米粒やるよ」

「・・・いない」

せつかくのクリスマススイブ。

学校も終業式だけで、普通のカップル達はラブラブモード全開で帰って行った。

普通のカップルではない私達と、

普通にカップルではない溝口君、奈々、遠藤君の5人は、学校の近くのカフェで「作戦会議」を開いていた。

「よし！解散」

「三浦。まだ何にも作戦立ててないだろ」

「作戦つて、藍原を落とす作戦だろ？俺、やっても無駄なことには労力使わない主義だから」

「・・・」

「それにそんなもん、遠藤が一人で考えろよ」

「友達だったら、それくらい協力してくれよー！」

「俺と遠藤つて友達だっけ？」

「・・・」

三浦君は冷た過ぎるし、遠藤君はかわいそう過ぎるけど、三浦君の言っていることには妙に説得力がある。という訳で、本当に「解散」となった。

「雛子。行こう！」

「うん！頑張ろうね！」

奈々と2人で気合を入れていたら、頭を真上からむんずと掴まれた。

「ヒナ。どこに行くんだよ？クリスマスイブなんて、恋人同士のイベントに決まってるだろ」

「・・・えーと・・・」

学校の外じゃ、みんなに「付き合ってます」アピールできないから、一緒にいる必要はないんじゃないかな？

と、言いたかったけど、言ったら何故か怒られそうなのでやめておいた。

「三浦。今日はずっと前から雛子とレストラン行く約束してたの」

「俺とヒナが付き合う前にした約束だろ。そんなもん、無効だ」

「なっ」

「ねえ！奈々、三浦君も一緒に行ってもいいかな・・・？」

妥協案を提示してみた。

でも、こういうのって、政治の世界とかではあっさり却下されちゃうんだよね、

と、思ったら。

「・・・まあ、私はいいわよ」

あれ？あ、そつか。三浦君が来るってことは溝口君も来てくれるかもしれないもんね？

「でも、三浦だけよ。溝口君と遠藤君はダメ」

あれあれ？

三浦君も首を傾げたけど、特に他に予定もないらしく「じゃあ一緒に行く」と言った。

「じゃ、俺は帰るな」

「う、うん」

いいの、奈々？溝口君、本当に帰っちゃうよ？

「俺は一緒に行きたい！！いいだろ、高山？」

これまた予定のないらしい遠藤君が、奈々に頼み込む。

「遠藤君か・・・ま、いつか。ね、雛子？」

「え？私はもちろんいいけど」

三浦君と遠藤君はよくって溝口君はダメなの？

しかも奈々がそう言うんだから、よくわからない。

いや、よくわかった。

「高山・・・これのどこがレストランなんだ！？」

レストランに入ったとたん、三浦君は憎々しげな声を出した。

「何言ってるの、三浦。立派にレストランじゃない」

「そうだぞ、三浦！すげーじゃん！！！！」

「さすが遠藤君！話がわかるわ！」

「おう！頑張ろうぜ！」

「もちろんよ！倒れるまで食べてやる！」

・・・・・・。

そうだった。

以前から奈々と「クリスマスイブに行こうね！」と約束していたレストラン。

その名も「デザートバイキング フレッシュ ピンクベリー」。
名前を聞くだけで、どういうレストランなのか、どういう内装なの
か、

そしてどういう客層なのかが分かる。

私と奈々はともかく、何故か違和感のない遠藤君。
そして違和感ありまくりの三浦君。

溝口君を連れてこなくて本当によかった。

「・・・目がチカチカする。耳が痛い。甘い匂いがムカつく。ヒナ、
帰るぞ」

「前払いだからもうお金払っちゃったし・・・」

三浦君はため息をつきながら、案内された席に座った。

「・・・匂いと見た目だけで、満腹になりそう・・・」

まあ確かに、カウンターの前には所狭しとケーキやアイス、お菓子
なんかが並べられている。

男の子にはちよっときついかもしれない。

「で、でも、サンドイッチやパスタもあるよ！カレーとかも。
それに、クリスマスィブで結構カップルも多いから、男の人もある
し！」

そう。それがせめてもの救い。

それでもまだ不機嫌な三浦君。
もうちよっとフオーローしようかと思ったけど、早速お皿片手に食べ

物を物色しに行った奈々と遠藤君に、遅れを取るわけにはいかない。

「三浦君！私も行ってくるね！」

「・・・ヒナ、俺を見捨てるつもりかよ」

取り合えず三浦君は置いて、私は早速チョコレートケーキとチーズケーキ、

そしてお目当てのクリスマス仕様のショートケーキをお皿に盛り付け、

キャラメル味の飲み物を取って席に戻った。

既に奈々と遠藤君は「早く！早く！お腹がすいた！」と言わんばかりに席で待っている。

「じゃあ、いったただきまーす！！」

3人が勢い良く食べたけど、奈々はちょっとフォークを止めて三浦君に嫌味っぽく言った。

「あれ、三浦。食べないの？」

「・・・食べない」

「1400円も払ったのにもったいない」

「・・・」

すると三浦君は私のお皿からチーズケーキを一つつまんだ。

「お、美味しいでしょ？」

「まーな。でも一個でじゅうぶん」

「そんな、もつたないよ！ねえ、甘くない物を取りに行こうか？」

三浦君を引っ張って、もう一度カウンターへ行く。

それは、私がお皿とフォークを取りに行ったホンの数秒間のことだった。

どこから現れたのか、3人の女の子達が三浦君を取り囲んだ。

「お一人ですかあ？」

んなわけねーだろ！！！！

つて三浦君の目が一瞬言っただけ、幸い女の子達には気づかれなかったようだ。

三浦君は、裏・三浦は隠して、「三浦君」モードでにこやかに言った。

「ごめんね。彼女と着てるんだ」

「ええー！そうなの？」

当たり前だろ！つて、また目が言ってる。

「そつかあ。ざんねえ〜ん。どの子なんですかあ？」

「そいつ」

いい加減うんざりしたのか、ちょっと裏・三浦に変身しつつ三浦君が私の方を顎でしゃくった。

・・・あ、そつか。私、三浦君の「彼女」なんだ。
・・・つて、凄い。

あの「三浦君」の彼女が私だなんて。

信じられない・・・

これで両思いなら最高なんだけど、そんな贅沢は言えない。

私を見た女の子達の顔には明らかに「こんな子が彼女！？ありえない！」って書いてある。

そうだよ、やっぱりおかしいよね・・・？

でも三浦君は女の子達を無視して私に近づくと、

「さっさと食おうぜ」と言って、私の手からお皿を取り上げた。

第19話 三浦君

「決めた」

遠藤君がフォークを握り締めて悲壮な顔をした。

「何を？」

「来年の抱負」

「まだクリスマススイブだぞ。早くないか？」

「善は急げ、だ」

「来年のことを言うと鬼が笑う、とも言っぞ」
「・・・」

何故か遠藤君には全く容赦のない三浦君。
かわいそう・・・

「何言ってるの、雛子。三浦はあんたにも容赦ないでしょ」
「そつか。でも、奈々にも容赦ないと思うよ？溝口君にも」

奈々がため息をついた。

「あゝあ。どうして三浦なんかとランチしなきゃいけないのよ」

そう言いながら、奈々はもう3皿目だ。

私と遠藤君は2皿目。

三浦君は、さっき私と一緒に取りに行ったカレーとコーヒーをゆっくり食べてる。

「あれ、何の話だっけ？」

「・・・三浦・・・俺の来年の抱負だって」

「そうだっけ。まあどうでもいいや」

「普通はそこで、『どんな抱負？』って聞くんぞ」

「どうせ『来年のクリスマススイブには藍原とここに来る！』とか言うんだろ」

「・・・なんでわかったんだよ」

当ってるんだ。

「無理だと思うけどせいぜい頑張れよ」

「・・・なんで無理なんだよ」

三浦君が「三浦君」モードになり真剣な眼差しで遠藤君を見つめた。

「まず一つ目に、これから1年の間に藍原が大恋愛をして、しかも失恋する可能性はかなり低い」

「・・・」

「よっぽどいい男が現れないと無理だし、藍原が振られるってのはありえないと思う」

「・・・」

「二つ目に、仮に一つ目が実現したとしても、藍原は『やっぱり遠藤には私はもったいなさ過ぎる！』って

気づいて、遠藤は振られると思う」

「・・・」

そして急にまた裏・三浦に戻った。

「とまあ、そーゆー訳だ。無理な抱負は初めっから抱くな。もっと簡単なのにしろよ」

「簡単？」

「例えば・・・『藍原に振られても泣かない』とか」

「三浦、おま、」

「お、電話だ。悪いなー。ちょっと外行くわ」

「・・・」

三浦君は言いたいことだけ言うと、携帯片手にさっさと店の外へ行ってしまった。

「――」

「飯島・・・何笑ってるんだよ」

「ご、ごめ・・・だって・・・ふふ」

なんて面白いコンビなんだろう！

奈々ちゃんもそう思ったらしく、

「裏・三浦にも使い道があるのね」なんて言ってる。

「なんだ、その裏・三浦って」

「学校で猫かぶってるのが『三浦』、素なのが『裏・三浦』」

「えー？なら、俺の前じゃ、100%裏・三浦だぞ」

「みたいね。喜んでいいんじゃない？三浦が本性見せるのなんて、よっぽど信用できる人間と、よっぽど嫌いな人間だけよ。私は後者ね」

「俺は？」

「あ。後者かも」

「・・・」

私も後者なのかなあ。

信用されてるとは思えないし。

「ま、どっちでもいいや。裏・三浦といると面白いし」

「あれだけいじめられても!？」

「飯島だっていじめられてるだろ？」

「うつ。うん・・・」

「でも三浦のあれは、一種の愛情表現なんだよ。気にするな」

「そ、そうなの？」

「そうそう。それにあいつ、意識的に『三浦』と『裏・三浦』を使い分けてる訳じゃないと思うぞ」

え？

「誰だって、大して親しくない奴には本当の自分を見せたりしないだろ？」

「適当に愛想よくして、当たり障りのない会話して。三浦はちよつとそれが極端なだけだ」

「・・・」

「てゆうか、三浦の場合は、見た目とか成績とかで、

「周りが勝手に『三浦はいい奴に違いない』って先入観持つことが多いから、

「三浦も期待を裏切るのが悪くて無意識に『三浦』を演じちゃうんだろうな」

私と奈々は顔を見合わせた。

「そうか・・・そうかもしれない。」

そして、もしかしたら三浦君はそれをなんとなくプレッシャーに感じていたりするのかもしれない。

「・・・私も三浦君に一目惚れして、勝手に『素敵な人に決まってる』って思い込んでた・・・」

「な？でも、実はあーゆー奴なんだよ。見損なっただ？」

見損なう？

うーん。そんなことはない。

確かに、八つ当たりされたり「ム力つく」って言われて、凄く落ち込んだ。

三浦君のせいで、友達もいなくなってしまった。

でも、それでもまだ三浦君を嫌いになれない。

一目惚れって厄介だ。

「雛子。それってもう一目惚れじゃないんじゃない？」

「え？」

「最初は三浦の見た目を好きになったかもしれないけど、

雛子は今はもう、三浦と言う人間が好きなのよ。裏・三浦も含めて」

「・・・三浦君と言う人間・・・」

「そう」

奈々は、眉をひそめた。

「雛子。あんたって、物凄く男の趣味、悪いね」

第20話 冬休み

なんちゃってカップルの私達は、
冬休みの間も特にデートらしいデートとかをすることはない。

「付き合ってます」アピールをするために、学校に宿題をしに行くくらい。

メールや電話もその予定を立てるのにしか使わない。

もつとも、冬休みの学校には部活をやっている人くらいしかないけど。

あ。あと、月島さん、ほとんど毎日来て勉強してるみたい。

それに、西田さん。

西田さんは毎日とはいかないにしても、ちよくちよく月島さんと勉強している。

2人とも凄いなあ。

私、三浦君に誘われなきゃ、休み中に学校に来ようなんて絶対思わないのに。

西田さんは、私達を見て安心したように微笑んでいた。

そして三浦君も「三浦君スマイル」で微笑み返していた。

「・・・西田さんには『裏・三浦』は見せてないんだね」

「は？」

「なんでもない」

それって西田さんは三浦君にとって、信用できる人間でも嫌いな人

間でもないってことなのかな？

それとも好き過ぎて、緊張して素が出せないのかな？

でも、どちらにしろ、三浦君はもう西田さんのことは吹っ切れたみたい。

だって、西田さんを見ても、昔みたいに切ない表情をすることはなくなっただし、

西田さんと話しても、特に明るくなったりすることもなくなった。

これは三浦君にとってよかった、のかな？

そんなことを考えていた時、あることに気づいた。

一つは・・・

「ねえ、三浦君。三浦君は私と付き合ってたなら、本当に好きな子と付き合えないんじゃない？」

そうなのだ。

私とこんな「なんちゃって」とは言えカップルをしていたら、三浦君に本当の彼女ができないじゃない。

私は三浦君と付き合ってたなくても、できないだろうけど。

すると。

「もうしばらく女はいい。疲れた」

「・・・何をそんな大人っぽいことを・・・」

「ヒナがさつさと立場を回復したらいいだろ。そしたら別れられる」

誰のせいでこうなったと思ってるの！？って奈々が怒りそうだ。

それと、もう一つ気づいたことがある。

「なんだよ？何見てるんだよ？」

私の視線に気づいた三浦君が宿題の問題集から顔を上げた。

「・・・うん。なんでもない」

「？あ、そっか。さては俺に見とれてたな？」

「・・・違う」

私はそう言ったのに、三浦君は「照れるなって」とか言いながら、また宿題を始めた。

確かに見とれてはいた。

三浦君は相変わらずかっこいい。

うん、入学した頃より大人っぽくなって、ますますかっこよくなつた気がする。

先輩とかにも告白されたりしてるみたい。

しかも、

クリスマスにデビューしたKAZUって言う芸能人と三浦君が似てるって、奈々が言ってた。

私もKAZUをテレビで見ただけ、中学3年生とは思えないほどかっこよかった。

そして確かに三浦君と似ている。

思わず「KAZUも二重人格なのかなあ」なんて思ってしまったくらい。

この分じゃ、3学期が始まったら三浦君人気は更に上がりそうだ。

そんな三浦君と、私が付き合ってる。

今でも信じられない。

だけど・・・

私は自分の左胸に手を当ててみた。

普通に、トクントクンと音を立てている。

三浦君と2人で並んで座ってる、なんて、少し前なら心臓が破裂するくらい緊張していた。

でも今は、そんなことはない。

もう一度、三浦君の横顔を見る。

やっぱりかっこいい。

でも、以前のようにドキドキする、って言うのとは違う。

「かっこいい」も前のキラキラしたかっこよさとは少し違う気がする。

これって、もしかして・・・

裏・三浦を知ってしまったて、やっぱり少し幻滅したのかな・・・？
そんなつもり、ないんだけど・・・

「だから。なんだよ、さつきからチラチラ見やがって」

「うん・・・やっぱりかっこいいな、と思って」

「・・・なんだよ急に。そんな褒めても米粒はやらないぞ」

「・・・いらない、って」

私、どうしちゃったんだろう？

ため息をついて、私も三浦君と同じ問題集に目を落とした。

三浦君は、学校でしか冬休みの宿題をやってないみたい。

私もそうだ。

それなのに、進捗状況には著しく隔たりがある。

それも、もし三浦君が私の手伝いをしてくれていなかったら、もっと隔たっていただろう。

あ。まただ。またこの問題わからない。

「三浦君・・・この数学の問題・・・」

「またかよ？」

三浦君がうんざりした声を出す。
だよね。

今日だけでもう5回目だもんね。

「ヒナはどうしてそんなに数学が苦手なんだよ」

「・・・さあ・・・三浦君は理系科目が得意だよ・・・いいなあ。
お医者さんにでもなるの？」

「理系科目が得意だったら医者か。なんて世界が狭いんだ、ヒナ」

だけど三浦君は呆れながらもちゃんと私に勉強を教えてくれる。

私なんかと付き合ってなければ、もっと自分のペースでさっさと宿

題を終わらせられるだろうに・・・
本当に申し訳ない。

「――、だ。わかったか？」

「あ。ごめん、聞いてなかった」

「・・・おい」

「ご、ごめん・・・」

三浦君は今度こそ完全に呆れたようだ。
でも、そんな憂い（ちよつと違うかな）を湛えた表情もなんだか色
つぽい。

「・・・やっぱり三浦君はお医者さんなんかになっちゃダメだね」

「なんだ、また急に」

「三浦君みたいにかっこいいお医者さんなんて、モテてモテて仕方
ないよ」

女の人に言い寄られまくったら、三浦君、またイライラしそうだも
ん。

それに、「三浦先生」目当てで病気じゃない人とかも病院にきそう。

だけど三浦君は、何やら勘違いしているようだ。

「そーか、ヒナ。俺がモテるのイヤか」

「えっ。そーゆー意味じゃ・・・」

「医者かあ。まあ、悪くない。でも私立の医学部なんて学費が高す
ぎて無理だな。」

となると、国公立の医学部だな」

あれ。

本当にお医者さんになるの？

「ヒナが受かるかどうか微妙だな」

「ええ？私、国公立の医学部なんて受けないよ？」

「バカ。ヒナが医学部に受かるわけないだろ。第一ヒナが医者になんかなったら、助かる患者も助からない」

・・・確かに。

「俺と同じ国公立のどっかの学部を受かるかな、って言う意味だよ」
「ああ、なるほど」

って、私、三浦君と同じ大学受けるの？
受かる訳ないじゃない。

それに、大学受験なんてまだ2年後だよ？
それまでこんな「なんちゃって」カップル続けるつもりなのかな？

疑問は色々あったけど、敢えて口には出さなかった。

最近三浦君のことが裏・三浦も含めてだいぶ分かってきた。

三浦君って、頭はいいけど、物事をあんまり深く考えないみたいだ。
「俺と同じ国公立に・・・」って言ったのも、特に意味はない。

「もし今すぐ受験するなら」という仮定の元、適当に言っただけだろう。

だから私も深く考えずに返すことにした。

「そうだなあ。じゃあ私は、文学部でも目指そうかな」

「医学部と文学部がある大学か。どこがあるかな。探してみないとな」

「2」

第21話 ショック

「雛子。ちょっと」

3学期が始まって少しした頃、

私は朝、教室に入るなり声をかけられた。

そこには望ちゃん初め、数人の女の子達が。

とてもじゃないけど、

「雛子って三浦君と付き合い始めたんだね。よかったね。それに今まで避けててごめん。」

また友達になつてくれる？」
って雰囲気じゃない。

むしろ「なんであんなんかが三浦君と付き合い合ってるの？」ってオ
ーラ全開だ。

三浦君。

残念ながら「なんちゃってカップル作戦」は裏目に出てしまったみたい。

私は、望ちゃん達に引つ張られるようにして、廊下の隅に連れて行かれた。

「雛子。なんで三浦君と付き合ってるの？」

ほら来た。

「えっと。あの、その・・・うん、なんか付き合うことになって」
「三浦君で西田さんのことが好きなんでしょ？それなのになんで雛子なのよ」
「・・・」

もう西田さんには振られたんだよ、って勝手に言っているのかな。

私が黙っていると、望ちゃんはその沈黙を別の意味に取ったらしい。

「やっぱりね。どうせ雛子が強引に三浦君に言い寄ったんでしょ？」
「そんな！そんなことしてない！」
「じゃあ、どうして三浦君が雛子なんかと付き合うの？なんか三浦君の弱味でも握ってるの？」
「そんな・・・」

敢えて言うなら、裏・三浦を知ってるけど。

「三浦君かわいそう。早く別れてあげなよ！」
「・・・」
「三浦君、本当は西田さんと付き合いたいんでしょ？土曜日、2人でデートしてたよ」
「・・・え？」

望ちゃんは、どうだ、と言わんばかりに胸を張った。

「映画館で2人を見たの。楽しそうにおしゃべりしてたわよ」
「・・・嘘」

「本当よ。他にも見たって子、たくさんいるんだから。西田さんとはともかく、

三浦君を見間違っことなんてないでしょ」

「・・・」

「わかった？あんななんか、所詮遊ばれてるか、仕方なく付き合っ
てくれてるのよ」

それだけ言つと望ちゃん達は行つてしまった。

ショックだ。

いくら三浦君と付き合つてると言つて、すぐに私の立場が良くなる
とはあまり思つてなかった。

むしろ、今みたいに嫉妬されるんじゃないかつて思つてた。

でも、まさか望ちゃんにあんな風に言われるなんて・・・

ううん。

こんなことで凹んでちゃいけない。

望ちゃんは三浦君のことを思つて、ああ言つただけなんだ。
きつとそうだ。

だけど・・・もう一つショックなことがある。

もちろん、三浦君と西田さんのことだ。

私、三浦君はもう西田さんのことは吹っ切れたんだと思つてた。

でも、違つたんだ。

まだ好きだつたんだ。

それに気づかず、私ったら、平気で西田さんの前で三浦君と一緒にいたりして・・・

三浦君、どんな気持ちだったんだろう。

西田さんはどう思ってたんだろう。

やっぱり、こんな変な関係やめたほうがいい。

そうすれば、三浦君も堂々と西田さんのことを好きでいられる。

もう1月だ。

西田さんと彼氏が別れるのは3月。

もしかしたら、今度こそ西田さんも三浦君のことを真剣に考えてくれるかもしれない。

いつもなら、行動の遅い私だけど、今回ばかりは早かった。

元々、あんな理由で三浦君が私と付き合ってくれていることに後ろめたさを感じてたし、

ちよつとでも早く、三浦君に楽になって欲しかった。

だから、お昼休み、早速三浦君に話した。

「三浦君。私、もう大丈夫みたい」

「大丈夫？何が？」

「だから・・・だから！友達！」

「は？」

「みんなね、私のこと少し見直してくれてるみたいだから、もう三

浦君と付き合わなくても大丈夫」

だけど三浦君は顔をしかめた。
なんか怒ってる。

「今別れたら、また前の状況に戻るだけだろ」

「三浦君と普通に『お友達』してたら大丈夫だよ」

「・・・ヒナはそれでいいのかよ」

「うん！三浦君に迷惑かけたくないし」

「迷惑だなんて言ってないだろ」

三浦君は、ぼつさりと冷たいことが多いけど、結構優しかったりする。

だからこうやって私の心配をしてくれてるんだろっけど、甘えちゃいけない。

それじゃ、いつまでたっても三浦君は私と別れられない。

それに、奈々という友達もできた。

それだけで本当にじゅうぶん。

私は思い切り笑顔を作ってみた。

西田さんみたいにかわいい笑顔とはいかないけど、普段の私よりは
いくらかマシだろう。

「ありがとう、三浦君。普通のカップルって訳じゃないけど、貴重
な体験させてもらっちゃった」

「・・・」

どうしよう。なんでも何にも言ってくれないんだろう。

私から言えってことなのかな？

でも、「さよなら」も変だよな？

「えっと。じゃあね。・・・これから、よろしく、ね・・・」

あれ。もつと変かな。

でも・・・

それ以外、言葉が見つからない。

私は、三浦君の顔を見ないまま、急いで教室へ戻った。

第22話 西田さん

はあ。

あれからまだ3時間しかたつてないのに、何度目のため息だろう。

三浦君は、いつもの「三浦君」だ。

溝口君とも遠藤君とも、それ以外の友達とも普通に楽しそうにおしゃべりしている。

ため息をついているのは私だけ。

やっぱり三浦君にとって私はお荷物だったんだ。

きっと今はすっきりした気持ちなんだろう。

「雛子、どうしたの？」

「・・・奈々・・・実は・・・三浦君と別れたの」

「おめでとう」

「・・・今、本気で言ったでしょ？」

「当たり前よ。こんなオメデタイことはないわ」

「・・・」

私はもう一度ため息をついた。

さっきまでのため息とはちよつと訳が違うけど。

「振られた、じゃなくて、別れたってことは、雛子から言ったの？」

「うん。やっぱりこんな変な関係はやめた方がいいと思って」

「そのくせ、未練ありまくりな顔してる」

「・・・そんなことないよ。だって、最近ちよつと、三浦君に対す

る気持ちも変わってきたし」

「変わってきた？」

「うん。・・・前ほど好きじゃないかも」

奈々は目を丸くした。

「おめでとう」

「・・・」

「でも、残念ながら、まだ雛子は三浦のことを好きだと思うけど」

「え？」

「だって、雛子が三浦を見る時の目。前より『惚れてます！』って感じたよ？」

あんな見せ掛けのカップルなのに、凄く幸せそうだし」

「そんなこと、ないよ・・・。前みたいにドキドキしないもん」

奈々が笑って言葉を続けたけど、私の耳には届かなかった。

私の目がある人に釘付けになったからだ。

「それは、お互い素を見せ合って遠慮しなくていい仲になっただけじゃ・・・」

「奈々、ごめん。ちょっと、私・・・」

そう言いながら私は腰を上げ、教室の扉に急いで向かった。

「私が、和歌と溝口君に仲良くなってもらいたくて、一緒に映画見ようって誘ったの。」

嫌な思いしたよね？ごめんなさい」

西田さんが泣きそうになりながら、私に頭を下げた。どうやら、自分と三浦君が噂になっっているのを知り、私に申し訳なく思ったようだ。

「そうだったんだ・・・」

「三浦君とは、その・・・本当に何も無いから」
「うん。分かってる」

西田さんの説明によると、実際に映画館にいたのは西田さんと三浦君だけではなく、月島さんと溝口君も一緒だった、とのこと。しかもそれは西田さんの計画だったらしい。

この西田さんの様子を見れば、西田さんと三浦君の間に何もなかったのは本当だと思う。

でも、あの三浦君が単に「溝口と月島が付き合うことになればいいな」なんて考えて、

わざわざ女の子と映画館に行くなんて考えられない。

遠藤君に対する態度を見ていればわかる。

それでも映画館に行ったのは、その「女の子」が西田さんだからだろう。

やっぱり三浦君はまだ西田さんを好きなんだ。

だけど、西田さんには・・・

「西田さんて彼氏いるんだよね？」

「うん」

「・・・でも、もうすぐ別れるって三浦君から聞いたんだけど・・・」

「うん」

「・・・そんなので付き合ってた、辛くないの？三浦君のこと振っちゃってよかったの？」

嫉妬とか嫌味とかそんな気持ちはない。

純粹に、不思議だったから聞いてみた。

西田さんはニツコリと微笑んだ。

「辛くないと言えば嘘になるけど、彼以外の人は今考えられないの」

「そう・・・」

「飯島さんも同じでしょ？三浦君以外考えられないでしょ？」

だから三浦君が私のこと気にしてた時も、諦められなかったんでしょ？」

三浦君以外？

私は思わずポカンとした。

三浦君以外の男の子を好きになる。

そんなこと考えてもみなかった。

前、溝口君に「一緒に新たな恋を探そうよ」とは言っただけど、

具体的に三浦君以外の誰かを好きになるなんて考えてたわけじゃない。

今、三浦君に対する自分の気持ちはよく分からなくなってきたけど・・・

私、これから三浦君以外の誰かを好きになることってあるのかな。

でも、少なくとも一つ確実なことがある。

今は西田さんと彼氏の間には、三浦君が割り込む余地はほんの１ミリもないということ。

それは、この西田さんの強く輝く笑顔が証明している。

第23話 ウォークラリー

「ぐ、ぐ、ぐべん・・・」

「いいって」

「でば・・・ゲホゲホ」

「電話してる暇があつたら寝て」

「・・・やっぱりいまがっこうにいぐ・・・」

あなた、誰ですか。

朝日ヶ丘高校恒例の（らしい）、寒中ウォークラリー。

1月の寒空の下、何が嬉しくて20キロも歩かないといけないんだろ。

いつそのこと、風邪でも引いて休みたい・・・

そう思ってたなら、なんと私じゃなくて奈々が風邪を引いたらしい。

「今日、学校を堂々と休めるなんて幸せなことよ。ゆっくり寝てね」

「でば、びなごがひとりになっじゃうじゃん・・・」

どうやら奈々は、自分がいなければ私が一人で歩くことになるんじゃないかと心配してくれているようだ。

確かにその通りではあるんだけど、だからって無理して奈々に出てきてもらう訳にはいかない。

「奈々、大丈夫だから。それにもし奈々が一緒でも、私すぐに疲れて口も利けなくなると思うし。」

一人の方が気楽に歩ける」

「ぞ、ぞう?」

「そうそう。だから奈々は早く寝てね」

「うん・・・わがった。じゃあね、がんばって」

「うん。頑張るね」

全く・・・。

私は苦笑しながら携帯を切ると、トイレを出て下足室へ向かった。

下足室はすでに体操着の生徒で溢れかえっていた。

みんな、手にはスタンプを押すための台紙を持っている。

20キロの間の4箇所に先生達が立っていて、通過するときに台紙にスタンプを押してくれる。

全部揃わないと、学校に帰ってきてもゴールしたことにならないのだ。

9時スタートだから・・・お昼過ぎには帰ってこれるかな。

みんな幾つかの仲良しグループに分かれ、「さむーい!」とか言いながら出発の合図を待っている。

私は望ちゃんの方を見てみた。

望ちゃんはこっちの方を向いてはいるけど、

私に気づいていないのか、隣の女の子と何か話している。

以前なら、望ちゃんと一緒に歩いてたんだろうけど・・・

ううん。それは無理か。

というのも、体育会系の部活のほとんどは、顧問から「歩くな。走れ」と言われているらしく、

陸上部の望ちゃんはもちろん走る。

しかも、体操着じゃなくて、競技用のランニングウェア。

つまり、ノースリーブに短パンだ。

見てるだけで寒い。

もし望ちゃんとこんなことになっても、望ちゃんとは歩けない。

「飯島。途中で倒れるなよ」

「あ、溝口君。溝口君も走るの？」

溝口君はウォーミングアップをしていたのか、この寒いのに少し汗をかいている。

さすがに望ちゃんのようにランニングウェアではないけど、半そでの体操着だ。

「うん。今年からバレー部も走ることになったんだ。・・・いい迷惑だよ」

「ふふ。頑張つてね」

「飯島こそ」

さすがに倒れはしないだろう・・・たぶん。

そうこうしているうちに、スタートの時間になった。

「走る組」が一斉に駆け出す。

スタート前はみんな愚痴つてたけど、さすがはスポーツマン、いざスタートするとみんな本気だ。凄いスピードで飛び出していった。

そして、その迫力に驚いて固まっていた「歩き組」もようやく我に返り、スタートする。

私はその「歩き組」の中でも最後尾だ。どうせ最終組に入るんだから、最初からおとなしくここにしよう。

前の方を見ると、西田さんと月島さんがおしゃべりしながら歩いている。

2人とも余裕の表情だ。すごいなあ。

その2人のもう少し前に、三浦君がいた。

溝口君はバレー部だし、遠藤君もバスケット部。

2人とも「走り組」だから、三浦君は他の友達とのんびり歩いている。

そう言えば三浦君。

中学の時は体育会系の部活をしていたらしいけど、高校では何もやっていない。

朝日ヶ丘高校は勉強重視で、部活動をやらなくても何も言われないから、帰宅部も多いのだ。

三浦君と別れて1週間。

一度も口を利いていない。

でもよく考えれば、付き合っていた1ヶ月間以外は三浦君と話したことなんてほとんどない。

そのくせ、たった1ヶ月で随分仲良くなれた、っていうか、打ち解けた気がしていた。

だけどそれは私の錯覚だったらしい。

三浦君は何事もなかったように以前の三浦君に戻り、挨拶くらいはするけど、

私に話しかけてくれるなんてことはない。

裏・三浦も見せないし、ましてや私のことを「ヒナ」なんて呼んでくれない。

当たり前だよな。

彼女でもなんでもない私にそんなことする訳ない。

そう、当たり前・・・

それなのに、私は何を落ち込んでいるんだろう。
どうして寂しがつているんだろう。

私はそれ以上三浦君の後姿を見ていられなくて、
地面に顔を落としたまま歩き続けた。

第24話 王子様とナイトと小間使い

「・・・飯島。やっと来たか」

1年3組担任の森田先生が手をこすりながらため息混じりに言った。

「すみません・・・」

「謝るなら俺じゃなくて坂本先生にしろ」

「え？」

「坂本先生は最終チェックポイントの校門前にいるからな。まだ後1時間以上は待つはめになりそうだ」

「・・・」

ここは第3チェックポイント。
時間は既に2時を回っている。

ここまで5時間かけて15キロ歩いたと言うことは・・・

「私、時速3キロなんですな」

「よく計算できたな」

当たり前です。

「つまり、分速50メートル。秒速にすると約83センチだ」

「・・・」

「後5キロ、死ぬ気で頑張れ」

「・・・はい」

森田先生にスタンプをもらった後、私は本当に死ぬ気で歩いた。だって、もう前にも後ろにも生徒の姿はない。

最終チェックポイントの坂本先生は、私一人のために後1時間も待たないといけないんだ……。

そう思うと嫌でも足が速くなる。

坂本先生は2年生の担任だから、直接勉強を教えてもらったことはないけど、

ちっちゃくて元気で明るい女の先生だ。

あの先生がこの寒い中、震えて待っていてくれるのかと思うと申し訳ない。

けど……いい加減、足が痛い。

体育会系の部活の生徒は、こんな距離、本当に走ったのかな……。

頑張っではいるんだけど、もう疲労困憊で、たださえでも秒速83センチなのに、60センチくらいになりそう

だ。
秒速60センチってことは、分速36メートル、時速だと、ええつと……2・2キロくらい？

ってことは、5キロ歩くのに2時間以上かかる……！

もっと早く歩きたいって気持ちと、もう歩きたくないって言う足が喧嘩しながら、

なんとか前に進む。

奈々は今頃寝てるかな？いいなあ。

そう言えば、2時を過ぎたら、ゴールした生徒は帰っていいんだっけ。

ってことは、もうみんな帰り始めてるって訳で・・・

ああ、もうやめたい。

寒いし、足は痛いし、寂しいし・・・

お腹が痛いとか嘔ついて、リタイヤしようかな？

でもせっかくここまで歩いたんだし、待っていてくれる坂本先生に悪い。

だけど・・・限界だ。

そう思って立ち止まったその時。

「飯島！」

聞きなれた声に顔を上げた。

「・・・溝口君」

私の進行方向から、つまり、学校の方から溝口君が走ってきた。もう制服に着替えている。

と言うことは・・・

「もしかして、一度ゴールしてから戻ってきてくれたの？」

「ああ。だって、いつまでたっても飯島だけ戻ってこないし」

「・・・」

「本当に倒れてるのかと思って見に来た」

見に来た？

5キロも走って？

「・・・」

「・・・悪かったな。三浦じゃなくって」

溝口君が不機嫌そうな声を出す。

「そ、そんな！そんなことないよ！ありがとう、嬉しい」

「でも、一瞬三浦かもって期待しただろ」

「うつ・・・」

でも、溝口君は「まったく」とか言いながらも、全然怒ってる感じじゃない。

私達は並んでゆっくり歩き出した。

「・・・うん。ごめん。正直、三浦君かな、って思った」
「やっぱり」

「でも、三浦君の方が嬉しいって訳じゃないのよ？

ただ、こういうのついていかにも『王子様』の役割だから・・・」

「どうせ俺は王子様じゃないし」

「そんな・・・でも・・・そうだね。溝口君は王子様ってタイプじゃないよね」

「正直だな、飯島」

そう。溝口君は王子様タイプじゃない。でも。

「強きをくじいて弱きを助ける。ナイトみたい」

「・・・もつとらしくないと思う」

「あはは、そう？似合うよ」

「じゃあ飯島はナイトに助けられるお姫様か？もつとらしくないぞ」

「そうねー。私は・・・お城の小間使いってとこかな」

「あー。そんな感じ」

私達はそんな取りとめもない会話をしながら、学校を目指した。

さつき、溝口君にああは言ったけど、本当に嬉しい。

こうやって私のことを気に留めてくれる人がいるなんて。

学校が近づくにつれて下校中の生徒とすれ違うことも多くなり、まだ体操着姿の私を見て「あの子、まだやってる」なんて声もちらほら聞こえてきた。

一人だったら、恥ずかしくて死にそうになってただろう。

でも、溝口君と一緒にいてくれたから、私は恥ずかしくなかったし、頑張れた。

「なあ、飯島。もしかして何か勘違いしてないか？」

学校が見え始めた頃、溝口君が言った。

「何かって？」

「先週、三浦と西田さんが映画館にいたって噂になってただろ？三

浦と飯島が別れたのって、

その直後だったからさ」

「ああ・・・別に勘違いしてないよ。溝口君と月島さんも一緒だったんでしょ？」

西田さんから、あれは溝口君と月島さんをくつつけるために、西田さんが考えた作戦だったって聞いた」

だけど溝口君は首を傾げた。

「やっぱり勘違いしてる」

「え？」

「あれ、言い出したのは多分西田さんじゃない。三浦だよ」

「ええ？」

「だって、月島は前に俺のこと振ったんだぞ？それなのに、月島の友達の西田さんが、

強引に月島と俺をくつつけようとするか？そんなことしても月島は嫌がるだけだろ」

・・・確かに。

じゃあやっぱり三浦君が？どうして？

・・・西田さんを連れ出す口実にそんなこと言い出したのかな・・・？

「あれは三浦なりの『お礼』だったんじゃないかな」

「お礼？」

「そ。『溝口のお陰で飯島と付き合っことができた。だから溝口にも月島とうまくいって欲しい』って」

「溝口君のお陰で私と付き合っことができた？」

確かに溝口君が三浦君に怒ってくれたから、三浦君は反省したわけ

だけど。
でも。

「『飯島と付き合うことができた』って表現はおかしくない？
『反省したから飯島と付き合ってやることにした』でしょ」

だけど溝口君はその質問には答えてくれなかった。

「それと、飯島はもう一つ勘違いしてる」
「へ？」

「ナイトってのは、所詮王子様の手下だ。王子様の命令なしじゃ動かないんだよ」

・・・これもまた言っている意味が分からない。

私が「どういうこと？」とか言っているうちに、私達は校門の前に
辿り着いた。

そこには、三浦君が立っていた。

第25話 認めない

「三浦君・・・どうし、」

「飯島さん！！！！！」

私の声を遮ったのは、真っ青な唇でガタガタ震えている坂本先生だった。

「あっ」

「は、早くスタンプ押させて！私、もう限界！！寒すぎる！！！」

「す、すみません！」

私は走って坂本先生に近づき、台紙を差し出した。

坂本先生はすぐにスタンプを押そうとしたけど、手が震えて上手く狙いが定まらない。

と。

「先生。僕が押します」

私の後ろからスツと手が伸びてきて、坂本先生の手からスタンプを取った。

そしてそのまま、私の台紙にポンっとスタンプを押した。

「ありがとう、三浦君。ああ、寒い！飯島さんも、早く校舎に入って暖まりなさい」

「はい。ありがとうございました」

私はお辞儀したけど、顔を上げた時にはもう、坂本先生は校舎に向かって小走りしていた。

なんか足がフラフラしてて、こけそうだ。

だ、大丈夫かな、坂本先生・・・

「じゃあな、三浦、飯島。俺、帰るから」

溝口君が三浦君と私から少し離れたところで、軽く片手を挙げた。

「あ、溝口君。あの、本当にありがとう」

「ああ。じゃあな」

「うん。お疲れ様。バイバイ」

私は溝口君に手を振って・・・それから三浦君を見た。

「・・・何してるの？」

「・・・別に」

三浦君は制服姿で、コートは着てるけどかなり寒そうだ。坂本先生みたいに、ここにずっと立ってたのかな。

「早く着替えて来いよ」

「う、うん」

私は走り出して・・・振り返った。

三浦君はまだ校門のところに立っている。

着替えて来いよ、って・・・それって、待ってるってことなのかな？

もしかして、ずっと私のこと、待っていてくれたのかな？

そう言えばさつき溝口君が、ナイトは王子様の命令なしじゃ動かないって言ってた。

あれって、もしかして・・・

私がボンヤリと立ち止まっていると、三浦君が「早くしろ！」と言うつぶつに顎をしゃくった。

私は慌てて校舎へと走り込んだ。

「俺が悪かったよ」

「・・・」

「ヒナのこと、何にも考えてなかったな」

「・・・」

「少しでも考えれば、簡単に分かったことなのに」

「・・・」

三浦君の声と表情は、凄く申し訳なさそうな感じをかもし出している。
だけど。

「三浦君・・・目が笑ってるよ」

「そうか？そんなことないぞ。俺は本当に悪かったと思ってだな」

「・・・」

「つぶぶ」

三浦君は堪え切れず、噴出した。

「あはははは、ヒナ、お前、身長何センチなんだよ・・・ははははは」

「・・・」

ここは、駅の中にある立ち食い蕎麦屋さん。

三浦君が「寒すぎる！腹も減った！」と言うので、入ることにした。立ち食いのお店なんて、三浦君も私も初めてだ。

だから、気が付かなかった。

「立ち食い」のお店では当然「立ち食い」するってことを。

「すみません。踏み台つてありますか？」

真面目な顔でお店の人にそう訊ねる三浦君の袖を、私は必死で引っ張った。

「三浦君！いいって！大丈夫だから！」

「大丈夫？どこが？・・・あはははは」

「笑わないで！」

そう。立ち食いのお店には、立って食べる用のカウンターしかない。それも、ちよつと高めのカウンター。

背の低い私は、ちよつと頭だけがひょこつとテーブルの上に出るだけ。

そんな状態で必死にお蕎麦を食べている私の姿がツボにはまったのか、

三浦君はずっと笑いを噛み殺してる。

うつん。殺してない。おもいつきり笑っている。

「はあゝ。もはや哀愁漂うな、その姿」

「・・・」

「写メ撮っていい？」

「ダメ!!」

・・・って、私、何してるんだろう。

三浦君とは別れたはずなのに。

これは・・・そう、これは、三浦君が私を待っててくれたみたいだから、

お礼にご馳走してるだけなんだから。

そうでしょ？三浦君。

そんな思いで三浦君を見上げていると、私の視線に気づいたのか三浦君も私の方を見た。

「カウンターから頭だけ出して睨んでも、怖くないぞ」

「・・・睨んでなんか、」

「ヒナ」

三浦君が、お箸をおいて私に向き直った。

いつになく真剣な表情に、ドキツとする。

「・・・何？」

「ヒナ。俺に嘘ついたな」

「嘘？」

「お前、全然友達できてねーじゃん。今日も一人だったし」
「・・・」

「なんで、あんなこと言った？俺と別れたかったのか？」
「・・・だって、三浦君は・・・」

まだ西田さんのこと、好きなんじゃないの？
そう言いたかったけど、何故か怖くて言えなかった。
三浦君が怖いんじゃない。

なんだろう・・・

自分でもよく分からないけど、なんだか怖かった。

「俺のこと嫌いになったのか？」

「違う！」

私がそう言うと、三浦君は急にニヤツと笑った。

普段教室では絶対にしない、裏・三浦の代名詞みたいなこの笑顔。

前だったら、「三浦君らしくない」って思ってただろうけど、
今は物凄く「三浦君らしい」笑顔だ。

「じゃあ、またもうしばらく付き合わないとな」

「えっ。いいよ、そんな」

「ダメ。ヒナに友達ができるまでは付き合う。あ、高山は含まないぞ。あれは認めない」

「認めない、って何を？」

「だけど三浦君は「さーな」ととぼけて、またお蕎麦を食べ始めた。」

第25話 認めない(後書き)

次回、最終話です。

第26話 プレゼント

「ヒナ。何がいい？」

そう言われても困る。

何がいいかなんて、考えてもいなかったから。

目の前にはたくさんのかわいいアクセサリ。

でも、これのどれかをつけるのが自分かと思うと、どれがいいのかわからない。

「・・・三浦君。やっぱりいいよ。いらない」

「買ってやるって言ってるんだから、遠慮するな」

遠慮するに決まってる。

今日はホワイトデー。ということで、三浦君が私に何か買ってやる、と、

このお店に連れてきてくれた。

男の子の三浦君がこんなかわいいお店を知ってるなんて意外だ。

あ。そっか、もしかして。

「ヒナ。『この店、元カノと来たことがあるのかな』とか思ってるだろ」

「・・・うん」

「ふふん」

嬉しそうな三浦君。

何故か三浦君は、私がヤキモチを妬くと喜ぶ。
つて、妬いてる訳じゃないんだけどね。

「残念ながらハズレだ。妹の誕生日に、無理矢理引っ張ってこられただけ」

「三浦君、妹さんがいるんだ？」

「うん。まだ8歳のくせしてマセてて困る」
「へえ」

三浦君の妹ならさぞかし美人なんだろう。
それに8歳でこんなお店知ってるなんて、お洒落さんだなあ。

「さあ、早く選べよ。俺、すげー居心地悪いんだけど」

三浦君が周りを見回して、顔をしかめる。
そうだろう。こんな女の子の子したお店。

「でも・・・あんなチヨコのお返しにこんなちゃんとしたアクセサリー買ってもらうの、悪いし」

三浦君の顔が更に渋くなる。
不機嫌全開だ。

「だったら、バレンタインのときに『あんなチヨコ』にしなきゃよかったんだよ」
「・・・」

そう。1ヶ月前のバレンタイン。
私は、こんな「なんちゃって」カップルなのに本格的なチヨコを渡されても三浦君も困るだろう、

と思い、「あんなチョコ」にしたのだ。

私自身、三浦君への想いがはつきりしないせいもある。

だけど・・・こうやってまた彼氏・彼女できることが凄く嬉しかったりもする。

自分でもよくわからない。

「まあ別にどんなチョコでもよかったんだけどさ」

三浦君が目の中の指輪を指でつまみ上げる。

小鳥が木の枝をくわえていて、その枝が長く伸びてリングになっているという、

かわいらしいデザインの指輪だ。

「遠藤と溝口も同じってのが気に食わない。俺、一応ヒナの彼氏だろ」

「う、うん。そうなんだけど・・・」

溝口君には色々とお世話になったし、

だからと言って三浦君と溝口君だけちゃんとしたチョコで、

遠藤君だけいかにも義理っていうのも気が引けて、

散々悩んだ挙句、3人ともチロルチョコの詰め合わせをあげた。

それでも、今まで男の子にチョコをあげたこともない私には大進歩だ。

でも、溝口君と遠藤君は喜んでくれたけど、三浦君は何故か不満そうだった。

別に「なんちゃって」彼女からもらうチョコなんて、何でもいいだろうに。

ちなみに奈々は「私、義理チョコはあげない主義なの」と豪語しながら、

溝口君にだけチョコをあげていたけど、溝口君はその意味をわかっていないようだった。

自分のこととなると、意外と鈍いものだ。

とにかく。

バレンタインのときは、私がある側で三浦君はもらう側だったから、

どんなチョコでも三浦君が困ることはなかっただろう。

だけど今日は、三浦君があげる側で私がもらう側。

こんな大それた物を買ってもらう訳にはいかない。

「私は三浦君の『一応』の彼女なんだから、私になんてお金使わなくていいよ」

「あのな、ヒナ、」

「それより、三浦君はまだ西田さんのこと好きなんでしょ？西田さんに何か買ってあげた方がいいよ」

「・・・はあ？」

三浦君が右目を細める。

これも不機嫌な証拠だけど、理由がわからない。

「あ！そつだ！西田さんと言えば！」

「・・・言えば？」

「3月に彼氏と別れるって言ってたよね？もう3月だよ？別れたのかな？」

「さあ」

「三浦君。もう一度告白してみたら？」

「・・・なんで？」

さすがの三浦君も、一度振られた相手にもう一回告白するのは気が引けるのかな？

じゃあ！

「せめて電話してあげて。慰めてあげたら三浦君のこと、好きになつてくれるかも」

三浦君が私をギロつと睨んだ。

・・・なんか、怒ってる、かも。
なんでだろ。

「そんなこと言うなら、本当に電話するぞ？」

「うん」

「いいのかよ？本当にするぞ？」

「うん」

「・・・」

三浦君が今度はため息をつく。
怒ったり呆れたり忙しい人だ。

「・・・そんなこと俺がしたら、ヒナは嫌じゃないのかよ？ヒナは俺のこと好きなんだろ？」

「えーつと・・・」

「・・・おい」

また不機嫌オーラが広がる。

しかも今度は、不機嫌どころじゃない。
はつきりと滅茶苦茶怒ってる。

「なんだよ、それ。俺のこと好きじゃないのか？」

「あ、あの、それが、自分でも最近よくわからなくて・・・」

「えっと・・・三浦君が私と付き合ってくれてるのは、私に友達を作るためだから、

私が三浦君のことを好きかどうかなんて、三浦君はどっちでもいいよね？」

三浦君だって私のことなんて好きなわけじゃないんだし・・・」

「・・・うるさい」

「え？」

「うるさい！うるさい！！うるさい！！！！」

「ええ？」

三浦君は怒ったまま私の手を引き、カウンターでさっきの指輪を買った。

そして、それを私の鞆の中に落とし、

「絶対もう一度、好きにさせてみせるからな！」

と言った・・・

――「王子様の片思い！」――完――

第26話 プレゼント（後書き）

＊おまけのお話が1つあるので、完結設定にしております。

「王子様の片思い！」を最後まで読んで下さり、本当にありがとうございます。
ございます。

そして・・・タロウの他小説をお読みの方、ごめんなさい。

「えー。三浦君でこんな人だったんだー」とお思いのことでしょう。
・

そう、こんな人だったんです。

と、とにかく、無事終わることができました。

応援、ありがとうございます。

そして！同時更新してきた「quartet」も先日完結し、
これようやく「先生の彼女！」のその後編を始めることができます！

（意味がわからない方、申し訳ありません。「王子様」も「quartet」も、

「先生の彼女！」というお話と連携していたりするので）

これから、よろしく願いいたします。

おまけ 溝口君の憂鬱

「・・・俺、あっちのベンチに座ってていいか？」

俺がそう言つと、飯島は「もちろん！」と言い、

高山は何故かちょっと膨れて「別にいいけど」と言った。

三浦はどうでもよさそうだ。

そもそも、なんで俺がこんなとこに来なきゃいけないんだ？
すげー、場違いなんだけど。

俺はベンチに腰を下ろして、あーでもないこーでもないと、やり取りしている3人を見た。

明日から、2泊3日の修学旅行。

行き先は北海道か沖縄のどちらでも好きな方に行ける。

7月にどちらに行きたいかアンケートを取られたが、

飯島は「北海道がいい」と三浦に言った。

三浦はどっちでも良さそうだったけど、飯島が「北海道がいい」と言った理由が、

「9月でも沖縄だと海水浴があるよね？水着なんて恥ずかしくて着れないから」だと知るや否や、

「絶対沖縄にしよう」と意地悪なことを言い出した。

飯島は全力で反対したが、三浦に逆らえるはずもなく。

飯島擁護の高山も、三浦に全力で邪魔者扱いされながら、沖縄を選んだ。

遠藤も沖縄。

藍原が沖縄だからだ。

となると俺は・・・悩んだ。

個人的には北海道に行きたい。

暑いのが苦手な月島は、多分北海道を選ぶから。

でも、いつも一緒にいる三浦や遠藤が沖縄なのに、一人北海道なのもつまらないし、

月島にはとくに振られてる。

それなのにわざわざ、月島が北海道だからと、北海道に行くのは月島に悪い気がして、

結局沖縄に行くことにした。

で、今日は飯島と高山が水着を買いに行くというので、

まあ、飯島の彼氏の三浦が付き合うのは分からないでもない。

だけど、なんで俺までつき合わされなきゃいけないんだ？

女用の水着売り場なんて、肩身が狭いったらない。

でも・・・沖縄を選んでよかった。

どうしても月島を諦めきれない俺は2年になつてからも、

放課後残って勉強している月島に、話しかけたりしていた。

月島も迷惑なら迷惑とはつきり言えればいいのに、変なところで優しく、

嫌な顔をせずに俺の相手をしてくれた。

ところが夏休み中のある日。

突然月島が「春に好きな人ができた」と言い出した。動揺した俺は、情けないことに月島を少し責めた。どうしてもっと早くそう言ってくれなかったのか、と。

そして・・・月島に思わずキスしてしまった。

実は、月島は中学の時、学校で男に襲われそうになったことがある。偶然それを見つけた俺が月島を助け、それ以来月島を気にかけているうちに、好きになってしまったのだ。

それなのに、俺はその男と同じようなことをしている。

そう思うと、心底自分が嫌になり、やっと月島を諦める決心がついた。

翌日、ちゃんと月島にそう言ったら、月島も笑って許してくれた。ただ、俺が月島にキスしたところを偶然月島の担任に見られてしまい、

月島も気まずい思いをしたようだ。

本当に、申し訳なくてため息がでる。

「溝口君」

「高山。もう買ったのか？」

また自己嫌悪に陥っていると、紙袋を手にした高山が俺の横に腰を下ろした。

三浦と飯島が一緒にいる時は、高山が俺の話し相手をしてくれることが多い。

サバサバした奴で、俺も気楽に話せる。

「うん。私、雛子みたいに優柔不断じゃないもん」

「・・・確かに、飯島は迷ってるみたいだな」

でも飯島だけが悪いんじゃない。

三浦が、絶対飯島が着たがらないような派手な水着をわざと選んで飯島を惑わせてるようだ。

「あの分じゃ、いつ決まるかわからないな」

「そうね。・・・ねえ、三浦って雛子のこと、本当に好きなのよね？」

「何を今更。どう見てもそうだろう」

飯島をおちよくってる時の楽しそうな三浦ときたら。

あんな三浦、ちょっとお目にかかれないぞ。

1年の時からおかしいとは思っていた。

いくら「ムカつく」と言ってもやたらめったら飯島に冷たくしたり、かと思えば、変なこじつけでいきなり「付き合っ」と言い出したり。

でも、三浦が西田さんを好きだったのは本当だ。

だから俺も「まさか」と思っていた。

だけどあの寒中ウォークラリーの日。

三浦はいつまでたっても帰ろうとはしなかった。

飯島を心配して待っていたのだ。

でも振られた(？)手前、飯島を迎えに行くこともできず・・・で、仕方なく俺が三浦に代わって勝手に飯島を迎えに行ったのだ。

「雛子は、三浦が自分のことを好きだとは今も思っていないみたい」

「・・・っぽいな」

「それどころか、自分自身も、三浦のことを好きなのかわかっているみたい」

「・・・」

「バカよね。見た？雛子のネックレス」

「ネックレス？」

「そう、指輪がつけてあるの。ホワイトデーに三浦が買ってくれたらしいんだけど、」

「ちよつと待て。三浦が指輪を買ったって？」

「うん」

あの三浦が、指輪？

本当に本気なんだな。

「しかも、小鳥のデザインのかわいい指輪」

「小鳥？ふーん。飯島が『ヒナ』だから？」

「そう。でも雛子は全然気づいてない」

「・・・」

三浦の奴。

てゆーか、飯島。気づいてやれよ。

「でもね、三浦ったら全然サイズを見ずに買ったから、雛子のどの

指にも合わなくって、

雛子は指輪にチェーンを通してネックレスにしてるの。いつも肌
離さず持つてる」

「それはそれは」

「うん。すごい三浦のこと好きみたいなんだけど、『昔みたいに
ドキドキしない!』とか言って、
悩んでる」

「・・・当たり前だろ。いつまでもドキドキなんかしてるかよ。ど
んだけ鈍いんだよ」

「でしょ?・・・でも、」

高山はちよつと膨れて言った。

「鈍いことに関しては、溝口君も負けてないけど」

「俺?いくらなんでも飯島ほど鈍くはないぞ」

「そう?私から見たら、どっちもどっちよ」

・・・そうなのか?俺ってそんなに鈍い?
って、どーゆー意味だ?

俺が首を傾げていると、高山がすくつと立ち上がった。

「ねえ、あんなバカップルに付き合ってたら日が暮れるから、何か
食べてようよ」

「そうだな」

俺も高山に続いて、ため息をつきながら立ち上がった。

三浦たちに目を向けてみる。

「コレ、試着してみろよ」

「こんなビキニ、私のスタイルじゃ着れるわけないよ!」

「ヒナのスタイルなんか知らないし。裸、見せてくれないもんな」

「どうして三浦君に私の裸なんか見せなきゃいけないの?」

「・・・」

つてな感じで、飯島がまた三浦の地雷を踏んでいる。

最近では、飯島にも高山にもちゃんとたくさん友達がいる。

それなのに、一向に別れようとしなない三浦を飯島は不思議がっているが、

今や2人はすっかり「おしどり夫婦」として認識されている。

いや、認識してない奴が一人いるな。

俺は、

頭を真上から三浦に掴まれて「痛い、痛い」と言っている「その1人」を見て、苦笑した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644/>

王子様の片思い！

2010年10月12日16時36分発行